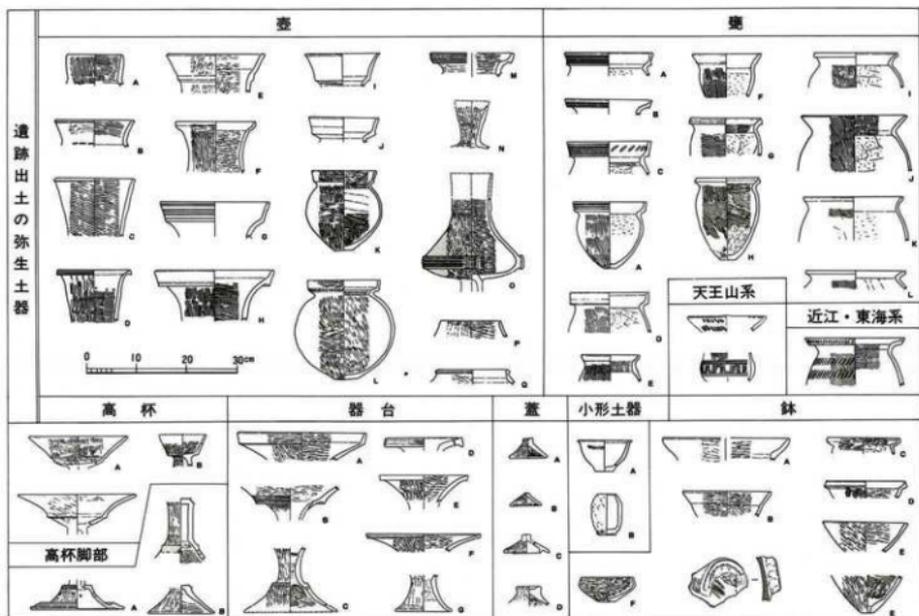


小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要



1992年3月

富山県小杉町教育委員会

例 言

1. 本書は、小杉町総合体育センターの建設に伴って実施した小杉町戸破若宮4・840番地外に所在する戸破若宮遺跡の発掘調査概要書である。
2. 調査は、小杉町教育委員会が主体となつて行なった。調査に当たって富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得、また、民間の調査機関の山武考古学研究所から調査員の参加協力を得た。
3. 調査事務局は小杉町教育委員会に置き、平成2年から平成3年6月までは事務局を主任金山秀彰が担当し、社会教育課長荒川秀次が総括し、平成3年7月からは生涯学習課長盛田寿子が総括した。
4. 調査担当者・調査面積は、次のとおりである。
 試掘調査：平成3年3月19日 延べ1日、発掘面積 約710㎡ 上野 章・原田義範
 本調査：平成3年3月29日～6月5日 延べ68日、発掘面積 約4,000㎡ 上野 章・原田義範
 荒井英樹（山武考古学研究所・5月から1ヶ月間）
5. 調査の実施にあたり、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センターから指導・協力を戴いた。
6. 調査期間の4月中旬から5月中旬までの間の土曜・日曜・祝日には、小杉町立小杉中学校・小杉南中学校の先生・生徒から全面的な参加協力を戴いた。また期間中、次の方々の調査協力を戴き、記して謝意を表したい。
 大江自治会・三ヶ谷自治会・戸破自治会・大江婦人会・三ヶ谷婦人会・戸破婦人会・各老人会・越前康佐・大島直樹・桐谷 優・黒田常雄・小村正之・納谷守幸・妻谷元良
7. 調査から概要書の作成にあたり、次の方々から教示を得た。
 狩野 勝・宮田進一・西井重洋・久々忠義・高梨清志
8. 柱礎分析は、邑本順亮氏に依頼し、その玉璽をいただいた。
9. 遺物整理は上野・原田が叫び、本書の編集・作成は上野が行なった。
10. 遺構番号の頭の分類番号は次のとおりである。
 SD：溝、SK：土坑・穴、SE：井戸、SX：不明、P：柱穴・柱穴状ピット

目 次

I 地形と周辺の遺跡	1	第8回	土坑遺構図	9
II 調査の経緯	2	第9回	SK40遺構図	10
1. 調査に至るまで	2	第10回	土坑・溝遺構図	11
2. 調査の経過	2	第11回	SE87遺構図	12
III 調査の概要	2	第12回	SD02遺構図	12
1. 立地	2	第13回	SD02、SK10～26遺構図	15
2. 調査の方法	2	第14回	土坑・溝遺構図	16
3. 順序	3	第15回	SD45・46・47遺構図	17
4. 遺構	4	第16回	SD05・68～89遺構図	18
(1) 弥生時代の遺構	4	第17回	SE38及び用水路敷きの遺構図	19
(2) 奈良～平安時代の遺構	13	第18回	用水路敷きの遺構	20
(3) 中世の遺構	14	第19回	SD01出土遺物	24
(4) 近世の遺構	21	第20回	SD01出土遺物	25
5. 遺物	22	第21回	SD01出土遺物	26
IV まとめ	44	第22回	SD01出土遺物	27
1. 弥生時代	44	第23回	SD01出土遺物	28
2. 奈良～平安時代	44	第24回	SD01出土遺物	29
3. 鎌倉～室町時代	46	第25回	SD01・10、02出土遺物	30
4. 近世	46	第26回	SD02出土遺物	31
引用・参考文献	46	第27回	SD03・06出土遺物	32
小杉町戸破若宮遺跡とその地下の化石柱礎について	47	第28回	SK07～SK35出土遺物	33
図版		第29回	SE38出土遺物	34
挿図		第30回	SE38～SK42出土遺物	35
第1図 地形と周辺の遺跡	1	第31回	SD43～SD56出土遺物	36
第2図 発掘区割り図	3	第32回	SD57～SD85出土遺物	37
第3図 遺構図	3	第33回	SE87出土遺物	38
第4図 SD01遺構図	5	第34回	SE87～SD108出土遺物	39
第5図 SD01・10遺構図	6	第35回	SD110～SD127 調査区出土遺物	40
第6図 SD01遺構図	7	第36回	出土遺物	41
第7図 SD03・04遺構図	8	第37回	時期ごとの遺構・遺物	45

I 地形と周辺の遺跡

小杉町は県西部にあつて、富山市と高岡市のほぼ中間に位置する。町の北側には、広々とした沖積平野の射水平野が広がり、南側には、起伏に富む小丘陵からなる射水丘陵が少しづつ、南に高くなり標高117mの高津峰山に連なる。

射水平野の地層は新しく、今から1万～8千年前に堆積した新生代第四紀沖積層によつてできあがつた砂や粘土・礫が層をなしている。今から約6千年前とされる縄文時代前期にあたる海侵の最頂期には、現在の5m等高線位まで海であったとされる。その後、下条川や和田川などの運搬した土砂により、射水平野はどンドン堆積し放生津潟が小さくなくて、自然堤防や砂洲を利用し人々が生活したものとされている〔北林1959・藤井1986〕。

戸破若宮遺跡は、下条川の右岸にあつて標高約2mの水田に立地している。この流域の低湿地は、降雨期のために河川や用水路があふれ、氾濫を繰り返して洪水の被害をくいとするのできない地域であった。現在は、大正14年に始まる下条川の改修や、その後、近年に至るまで射水平野の土地改良が行われ、新しく大きな排水路が設けられて乾田化された豊かな田園となっている。

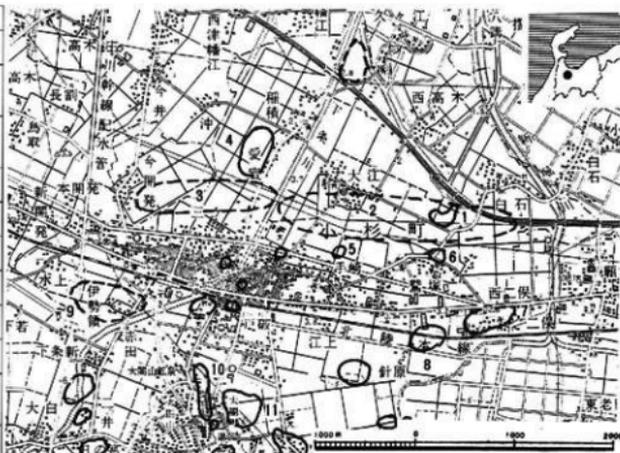
この下条川流域での人々の足跡は古く、伊勢領遺跡からは、縄文時代中期の石斧・石棒・石錘や弥生時代の船刃石斧・偏平片刃石斧が出土している。また、二ノ井遺跡や高寺遺跡からは、弥生時代から古墳時代にかけての土器が河川改修のさいに地下1～2mの深さから発見されている〔木倉1956〕。

この他、戸破若宮遺跡の北東約1kmの県道建設工事に伴い、地下約1mの深さから縄文後期の土器〔上野1992〕が出ている。平成2・3年の発掘調査では、白石遺跡や針原東遺跡から弥生時代から古墳時代にかけての溝や井戸などの遺構や土器が見つかっている。

文献によれば、下条川以東の戸破・手崎・小白石などには、平安時代から室町時代末期までの約500年にわたって倉垣庄の存在していたことが知られており、庄内には加茂社の末社が二十社前後と多く分布している。これらの末社はいずれも近世以前の親村に限れ、その勧進は古く、南北朝期か室町期初めと考えられている〔木倉1956〕。

下条川以東の平野部からは、最近、古代以降中世・近世にかけての遺物が各所から出土しており、弥生時代以降に稲作農耕を基盤とした低湿地の開発状況が遺跡の分布から少しづつ明らかになっている。

No.	遺跡名	主な時代
1	白石	弥生・古墳・中世
2	仮称新幹線分布調査No.4	弥生～中世
3	仮称新幹線分布調査No.3	古墳～中世
4	愛宕	奈良・平安
5	戸破若宮	弥生・中世
6	鷺塚	古墳
7	西二俣	弥生・古墳
8	針原東	弥生・中世
9	伊勢領	弥生・奈良
10	中山中 中山南	弥生・古墳
11	三谷	弥生



第1図 地形と周辺の遺跡

II 調査の経緯

1. 調査に至るまで

平成12年に富山県で開催される第55回国民体育大会（2000年国体）は、県内全域の競技会場で39種目の競技が開かれる予定である。このため富山県準備委員会では、早くから会場地市町村の選定に入り、各市町村の誘致希望競技の調査と各競技団体から意見を聞き調整が進められてきた。そして平成3年5月24日に全種目の競技会場が確定した。

小杉町では、町教育委員会が窓口となり平成元年に誘致委員会を設け、これまでの実績や競技環境から柔道・ハンドボール・相撲を希望していた。平成元年9月には、全国中学柔道大会の小杉町開催が決まり、関係者は平成4年8月の同大会、平成6年のインターハイ、2000年国体の開催へと期待がかけられていた。小杉町では全国中学柔道大会の競技会場に既存の町体育館を利用する予定であったが、検討の結果、耐震構造の不足が問題となり平成2年6月に急遽、新たな施設として小杉町総合体育センターの建設が決定された。

建設用地は、平成2年11月に町北部の戸破若宮地内に定まり、その後用地の取得が進められた。

この用地に周知の遺跡は存在していなかったが、仮称新幹線分布調査NO.4遺跡に近いことや、以前の試掘調査地点の周辺に古代の遺物が散布していたことから、平成3年1月24日に遺跡の分布調査を実施した。その結果、建設用地の広い範囲から弥生～古墳時代にかけての土器を採集し、新たに遺跡の所在が明らかになり、3月19日に試掘調査を行なった。

2. 調査の経過

試掘調査は、用地北側の建物敷地を中心に発掘し、遺構がかなりの広がり存在したため、引き続き本調査が必要となった。計画では、5月上旬に外工工事を開始して、7月上旬に基礎及び躯体工事の着工・地鎮祭を行い、1年程の工期で完成する。平成4年8月の落成式を経て、全国中学柔道大会が新装なった小杉町総合体育センターで開かれる予定となっている。

このような状況から、本調査の期間は、4・5月の2ヶ月と制限された。調査は、3月29日から重機による表土耕土、発掘器材の準備、基準杭の設置等を行い、4月5日から遺構面の検出を開始した。調査では土・日・祝日に延べ約440人に及ぶ中学生の参加協力や引率の先生をはじめ、多くの方々の援助・協力を得て実施した。

調査期間中は、雨天が少なかったことも幸いし、調査対象地における主な遺構発掘は5月16日に終了した。5月後半は平面図の図化作業や、井戸の発掘・遺物の取り上げ等の補正作業にあたった。また5月22日～26日までの5日間は周囲をめぐる用水路敷きの調査に主力をおいて作業を進めた。このように工事計画との調整から強行な発掘調査工程も6月5日に発掘器材を引き上げひとまず調査を終えた。

III 調査の概要

1. 立地

対象地は標高2.9mの水田で、約30年程前に圃場整備が行なわれ、今では殆ど高低差が見られないが、東側はわずか10cm程の低地になっている。整地以前の地図では、対象地付近に南北に連なる畑地が存在しており、地元の人によると周囲より1尺弱と高いため田に水のあたらない場所であったと云われる。当遺跡は、このように平野部のわずかな微高地上に立地している。

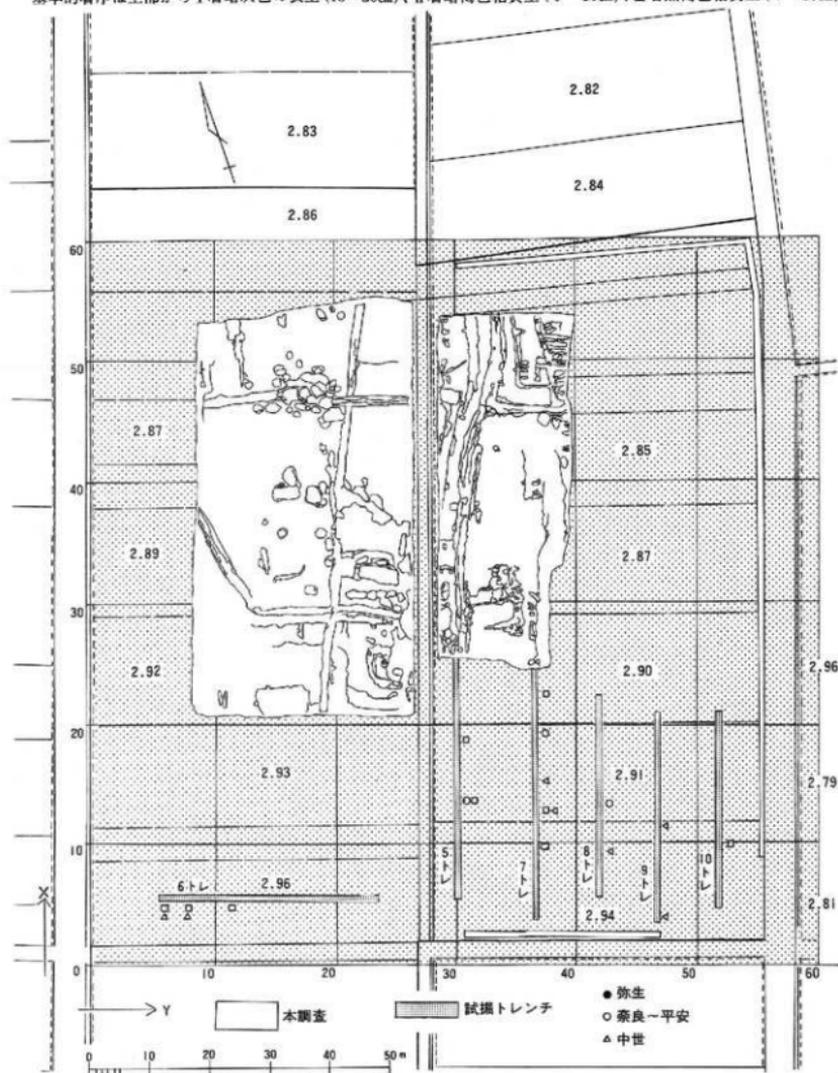
2. 調査の方法（第2図）

調査に際して事前に重機により耕作土及び一部下層の土を除去し、10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向にと

り、Y軸を東西方向にとって2m四方を1区画とするグリッドを設定をして、遺物の取り上げを行なった。調査はY29列の道路を境にして西側から開始し遺構掘りと記録作業を平行させながら東側へと進めた。

3. 層序

基本的層序は上部からⅠ層暗灰色の表土(15~20cm)、Ⅱ層暗褐色粘質土(0~10cm)、Ⅲ層黒褐色粘質土(0~20cm)、



第2図 発掘区割り図

IV層遺構検出面の淡灰褐色砂質土または、砂層となっている。IV層の砂層は、南端がX2・3区Y35区付近、北端がX54Y19区付近を結ぶ南北方向に数mから10mの幅でみられ、両側は淡灰褐色砂質土となっている。土層は砂層の上から東側がⅡ・Ⅲ層の堆積がIV層まで0-10cmと薄く、砂層の西側は10-20cmと厚く堆積していた。

4. 遺構

(1) 弥生時代の遺構

遺構は溝4・土坑19・井戸1を数え、広い範囲から確認され、いずれも遺構の覆土も黒褐色土であった。

SD01 (第4～6、図版第2) 溝は調査区内のY19～23列を南北方向に縦走し、約68mの長さがある調査区外に伸びている。溝の幅は1.4m前後あって最小が1.2m、最大が1.8mである。深さは北端が遺構掘込み面から75cmと最も深く、底面の標高が1.95mをはかり、南端が遺構掘込み面から30cmと浅いが底面の標高が2.10mとわずか15cmの差で地形の勾配にそって北側が低くなっている。溝の断面形は深い北側がV字状をなし、SD02以南がU字状に掘込まれる。溝の覆土は基本的に、上層に黒褐色土が入り次いで暗褐色土及び、暗灰褐色土が堆積して下層の淡灰褐色土や淡褐色土などとなり、底面にごく薄く砂層がはいる。

遺物の出土は調査内の全体にあたる約68mにわたっているが、市側15m程出土量が少なく遺物は溝のかなり上面に位置していた。またそれ以外のところでも遺物の出土高さは、セクション幅60-80cmでの水平方向の投影図に示したように遺構検出面の黒褐色土から始まり溝の中程の深さまで多く包含する。下層では少なくなっている。

遺物の大半は細かい弥生土器の破片で占められており、まれにひすいや砥石(第4図の左)が含まれている。土器には壺・甕・高杯・器台・蓋の器種があり、時期は後期後半にあたる。また多くの個体数があるにもかかわらず人形破片や完形に復元できるものが殆ど存在せず、接合した破片の出土範囲もせいぜい数mの狭い範囲に限られており、まとまった一括遺物や、遠く隔たった破片が互いに接合する例は今のところない。このような遺物の出土状態から、溝が少し埋まり始めた頃にこわれて破片になった状態の土器が溝に捨てられ、その後自然に埋まったと推定される。

なお、SD10の溝はX38-40Y25区にかけて分かれ、SD01と似た覆土が入り、出土土器に接合例がある。

SD03 (第7、図版第3) 溝はX33-36Y28-34区付近に位置し、表上の直下には淡灰褐色のIV層がみられ、溝覆土の黒褐色土が弧状に広がっている。溝の規模は、南北方向の長さ2m、南端での東西方向の長さ6.7m、中程での東西方向の長さ1.4m-2.7mと幅に変動がある。底面は概ね平坦で、遺構掘込み面からの深さは10-15cmと浅く、本来はもっと深さを有していたと思われる。遺物は、薄く残る黒褐色土から弥生後期の壺・甕・蓋の破片が少し出土し、主にC・Eセクション付近から出土した。またSD03の北側に30×50cm、深さ35cmの黒褐色の小ピットがあり、中から弥生土器3点と土鏟が出た。同様の覆土をもつ小ピットはX35-37Y32-36区付近に8個程存在していた。

SK07 (第8図) 土坑はX54Y21区に位置し、規模は、直径0.65m、深さ30cmで土器1点が出土した。

SK08 (第8図) 土坑はX53Y23区に位置し、規模は、直径0.55m、深さ42cmの円筒形をなし土器5点が出土。

SK09 (第8図) 土坑はX40Y23区に位置し、平面が0.9×1.3mの不定形な長方形。深さは10cm弱で土器数点。

SK11 (第8図) 土坑はX50Y17区に位置し、平面が0.5×0.6mの楕円形。深さは32cmで底面皿形をする。

SK12 (第8図) 土坑はX51Y17区に位置し、平面が1.1×1.3mの楕円形。深さは30cmで土器数点が出土する。

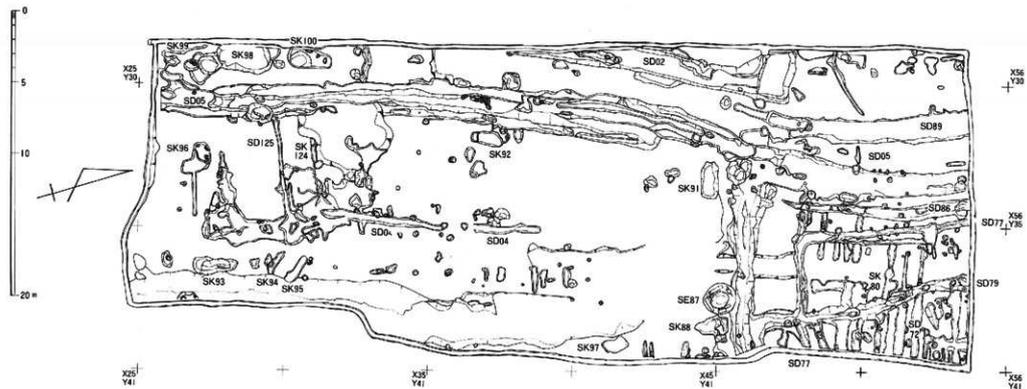
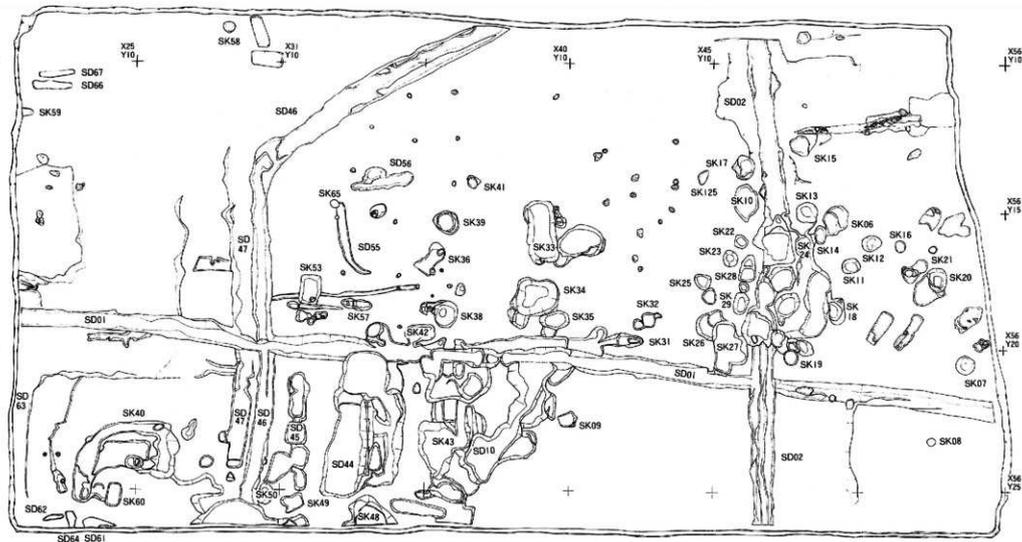
SK14 (第8図) 土坑はX49Y16区に位置し、平面が0.8×1.2mの楕円形。深さは22cmで土器数点が出土する。

SK16 (第8図) 土坑はX52Y17区に位置し、平面が0.7×0.8mの楕円形。深さは12cmで土器数点が出土する。

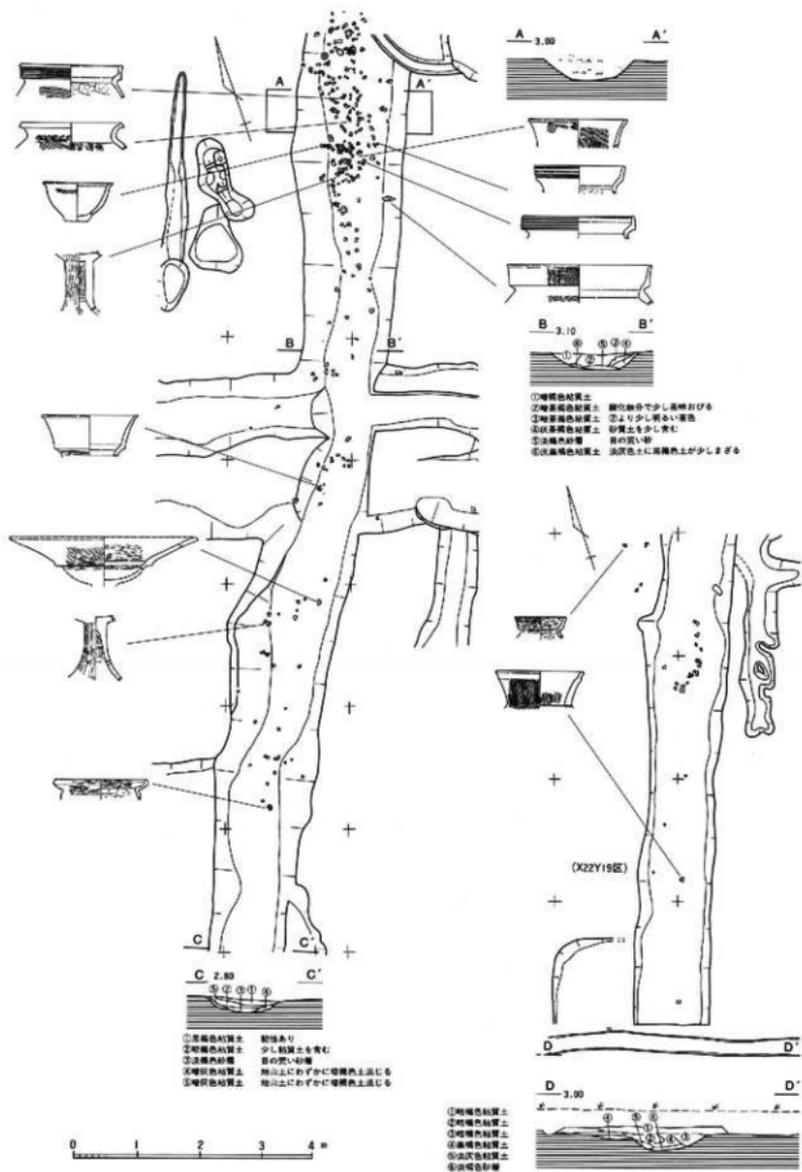
SK20 (第8図) 土坑はX53Y18区に位置し、平面が1.2×1.7mの楕円形。深さは50cmで土器数点が出土する。

SK21 (第8図) 土坑はX52Y17区に位置し、平面が1.3×1.9mの楕円形。深さは西側が15cm程で、東側が40cm程と深く、遺物は土器2点が出土した。覆土は付近のSK11・12・16・20と共に黒褐色砂質土や粘質土が入る。

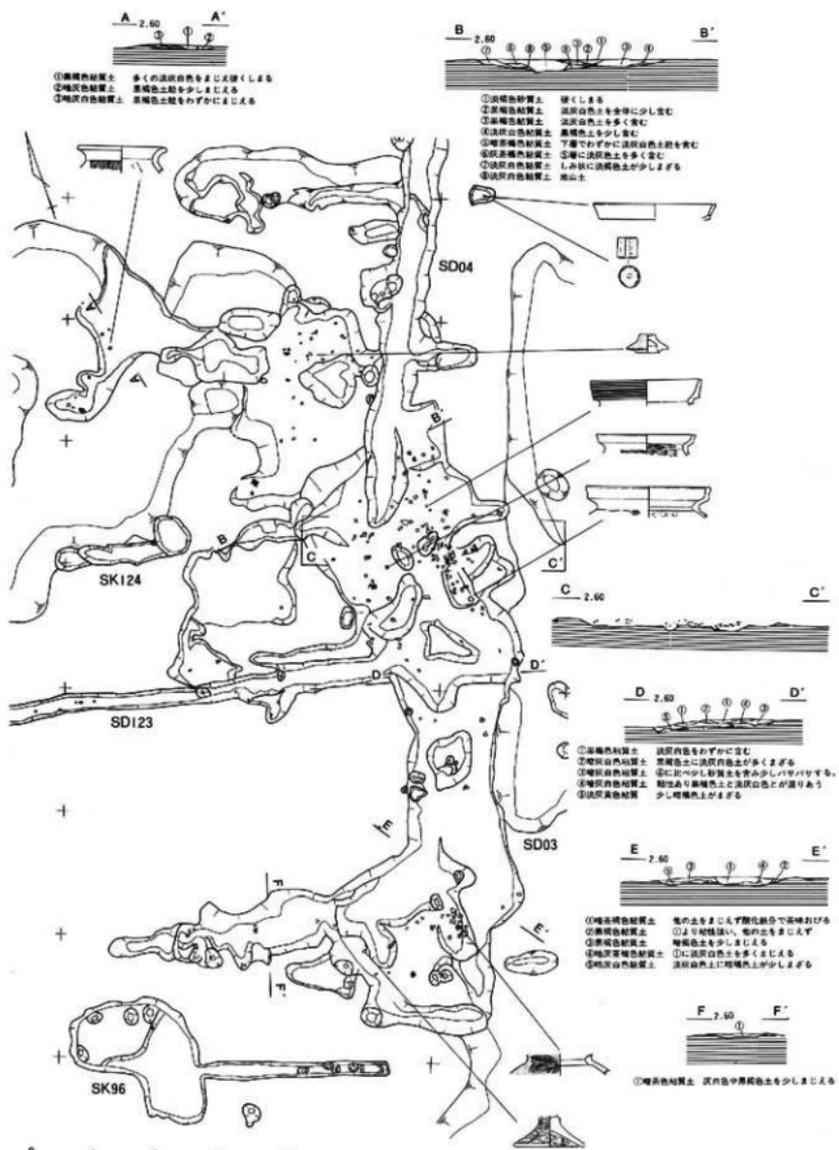
SK22 (第8図) 土坑はX46Y17区に位置し、平面が0.85×1.0mの楕円形。深さは20cmで土器数点が出土する。



第3図 遺構図

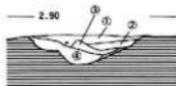
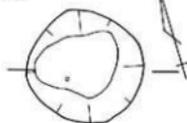


第6図 SD01遺構図 (X21-32Y19-21区、1/50)



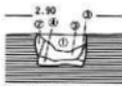
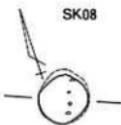
第7図 SD03-04遺構図(1/50)

SK07



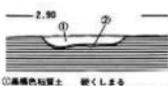
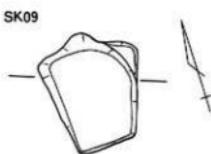
- ①黄褐色粘質土 まの跡かひ跡で少し陥凹も打びる
 ②灰褐色粘質土 ①より黄味強く陥凹あり
 ③灰黒褐色粘質土 ①の土に灰白色の砂質土を少し含む
 ④黒褐色粘質土 ①より少し陥凹あり、灰白色砂質土を含有
 ⑤灰白色砂質土 少し黄褐色土を含む

SK08



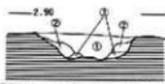
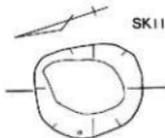
- ①黄褐色土 陥凹あり
 ②灰褐色土 ①層よりやや軟弱
 ③灰白色土 ②層に灰山の遺り(黄白色砂質)
 ④黒褐色土 黄色粘土粒混り

SK09



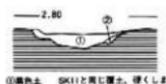
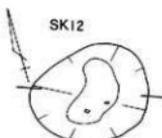
- ①黄褐色粘質土 陥くしまる
 ②暗黄褐色粘質土 黒山砂層に黄褐色土が少しまざる

SK11



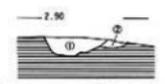
- ①黒色土 かくたしりぬの土をまき入らず少し砂質
 ②灰黒色土 ①層に灰山の砂の混り
 ③灰黒色土 砂と黒色土の混り少くない

SK12



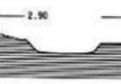
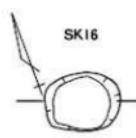
- ①黒色土 SK11と同じ層土、陥くしまる
 ②灰黒色土 黒山砂と①層の混り

SK14

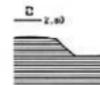


- ①黒色土 SK11と同じ層土、陥くしまる
 ②灰黒色土 黒山砂と①の混り

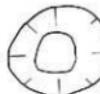
SK16



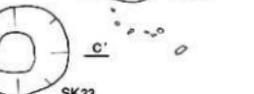
SK22



SK23

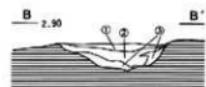


SK28



- ①黄褐色粘質土 少し黒色土粒を含む
 ②黒褐色粘質土 黄褐色土を少し含む
 ③黄褐色粘質土 灰白色砂質土を少し含む
 ④暗褐色粘質土 黒褐色土を少し含む
 ⑤灰白色砂層 わずかに黄褐色土を含む

SK20



- ①黄褐色粘質土 わずかに灰白色砂質土が入る
 ②黒褐色粘質土 わずかに灰白色砂質土が入る
 ③灰黒褐色粘質土 灰白色砂層に黒色を少し含む

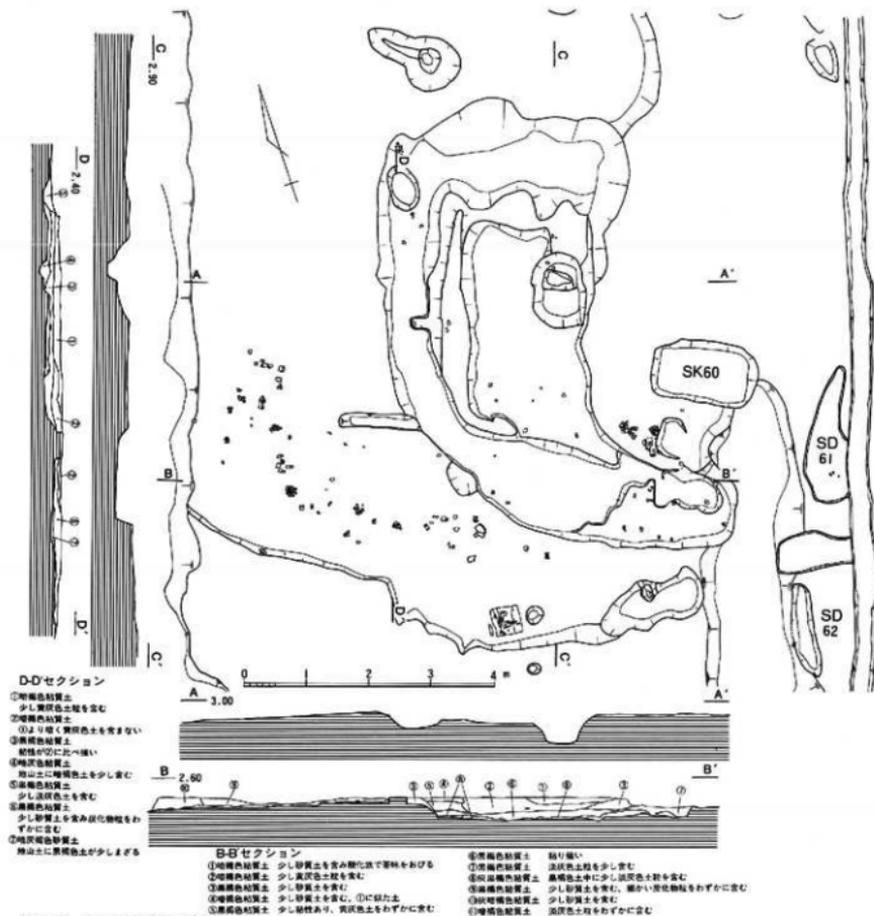
第8図 土坑遺構図 (1/60)

SK23 (第8図) 土坑はX46Y17区に位置し、平面が1.0×1.15mの楕円形。深さは15cmで土器数点が出土する。

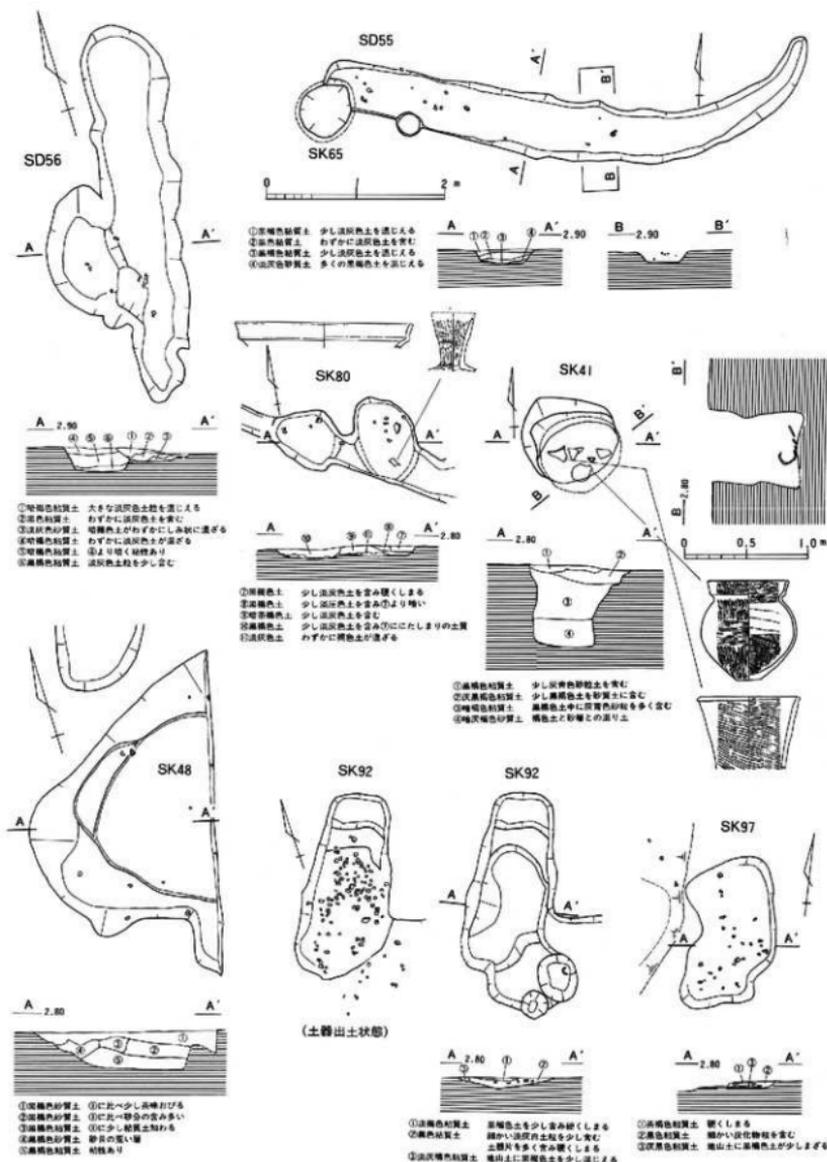
SK28 (第8図) 土坑はX47Y18区に位置し、平面が1.2×1.85mの楕円形。深さは西側が15cm程で、東側が20cmと少し深く掘られる。覆土はSK22・23と同じ様に黒褐色土砂質土や粘質土からなり、土器が数点出土した。

SK39 (第3図) 土坑はX36Y16区に位置し、直径が上面で1.5m、30cmの深さから直径が0.8mの円筒形となり、底面までの深さが80cmである。覆土は主に黒褐色粘質土が堆積し、中から土器3点が出土した。

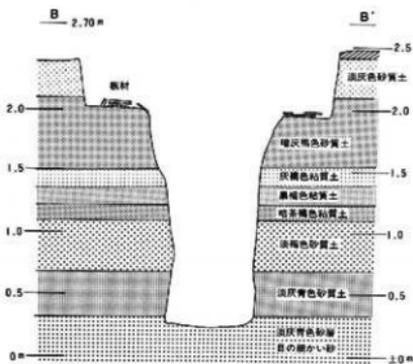
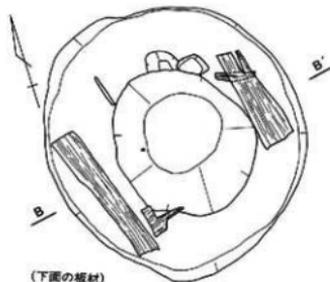
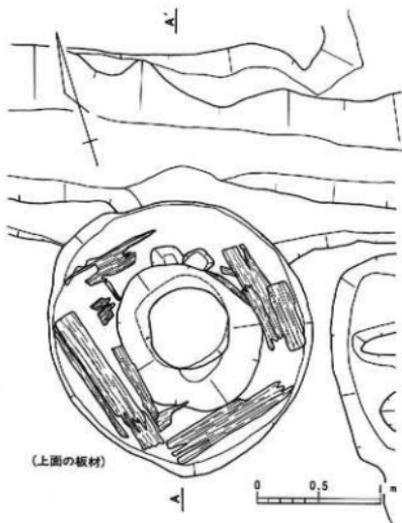
SK40 (第9図、図版第4) 遺構はX23-27Y22-26区に位置し、南端には遺構確認面から深さ数cmの黒褐色粘質土をした落ち込みがあり、黒褐色土の広がりは北側と、東西方向に約9m以上存在したが、自然堆積土の黒褐色粘質土と区別がつきにくく、IV層の淡灰褐色土まで下げて遺構を発掘した。南西側では、2.5×6.0mの範囲の浅い落ち込み内から壺や甕の大きな破片が多く出土した。またX24-27Y24-25にかけて別の遺構が存在した。南北の長さが7.0m、



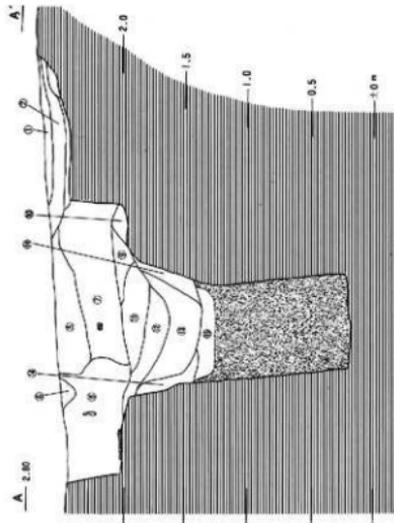
第9図 SK40遺構図(1/6)



第10図 土坑・溝遺構(SK41は $\frac{1}{4}$ 、他は $\frac{1}{2}$)

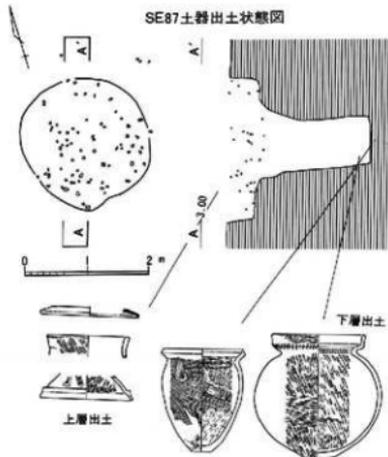


第11図 SE87遺構図



- ①淡褐色粘質土 少し砂質土を含ませよくする
- ②淡褐色粘質土 淡褐色土を含ませよくする
- ③淡灰褐色粘質土 淡灰褐色土を少し含む
- ④淡灰褐色粘質土 淡灰褐色土をわずかに含む
- ⑤暗赤褐色粘質土 淡灰褐色土を混成物に少し含む
- ⑥暗赤褐色粘質土 淡灰褐色土をわずかに含む
- ⑦暗褐色粘質土 淡灰褐色土を多く含む
- ⑧淡褐色粘質土 淡灰褐色土と暗褐色土を少し混成物に含む
- ⑨淡褐色粘質土 暗褐色土に暗褐色土を多くまじえる
- ⑩淡褐色粘質土 暗褐色土に淡灰褐色土を少しまじえる
- ⑪黒褐色粘質土 色が暗いところとした
- ⑫暗褐色粘質土 少し砂質土を含まバヤヤしている
- ⑬暗褐色粘質土 色が暗くベタベタした土
- ⑭黒褐色粘質土 暗褐色土を多く含む

SE87土器出土状態図



東西の幅が約4.0mの規模をもち、西寄りに「C」の字状に湾曲して深くなっている。深さは南から西側が30cm程を有し、北側で数cmと浅い。遺物は淡灰色土と黒褐色土の混土層の覆土から弥生土器・須恵器・珠洲が出土していて、この溝は出土遺物から時期が中世になる。X23Y24区では45cm角程の板を中心に赤地の漆器椀・刀子・砥石がまとまって出土したが、発掘時に動かしたため各配置は把握していない（図版第7の1）。時期は不明で近世か。

SK41 (第10図、図版第3の10) 土坑はX37Y15区に位置し、直径が0.75mの円筒形をなす。深さは底面まで75cmあって、底から完形に復元できる壺1個と長頸壺の口縁部が出土した。

SK48 (第10図) 土坑はX33・34Y26区に位置し、遺構は東側に広がる。規模は南北が3.80m、東西が2.0mあり、深さが60cmで遺物は、黒褐色砂質土の覆土層から土器が10点程出土した。

SD55 (第10図) 溝はX33Y16～18区に位置し、規模は東西の長さが5.4mで、幅が0.5～0.6mの弧状をし、深さが15cm程の溝である。出土遺物は10点程の土器と石鏃1点が黒褐色粘質土から出ている。

SD56 (第10図) 溝はX33～35Y15区に位置し、規模は南北の長さが5.4mで、幅が0.8m、中程で1.6mとなる。深さは、張り出し部で15cm程あり、他は10cm程と浅い。出土遺物は10点程の土器が出ている。

SD61 (第9図) 溝はX24・25Y27区に位置し、更に東側に広がる。規模は南北の長さが2.2mで、深さ15cm程で、黒褐色粘質土の覆土から土器数点が出ている。

SK80 (第10図) 土坑はX52Y37区に位置し2個が隣接する。平面形は0.7×1.0m程と0.7×0.8m程の楕円形をなし、深さは15cm程で、黒褐色粘質土の覆土から土器20点程が出土した。

SE87 (第11図、図版第3の7・8) X45・46Y38区に位置し、二段掘りした素掘りの井戸である。規模は2.05×2.25mのほぼ円形で深さ50cmの上段と、この中央に上径1.0×1.25m、底径0.7×0.8mの円筒形をした深さ1.75mの井戸筒を設ける。底の標高は0.2mの高さである。上段の土坑底面には、四角く二列に板を配する。板は0.85m、1.15m、1.3mの各長さがあり、15～23cmの幅で2～3cmの厚さをもつ。遺物は上段部のもと、井戸の底から出土したものがある。最上層部には珠洲や須恵器の新しい土器が混ざり、底面には壺・甕などと板材が出土した。

SK92 (第10図) 土坑はX37Y32区に位置し、規模は1.0×2.45mの長方形をなし、深さが5～15cmである。覆土の黒褐色土から細かい土器片が折り重なるように数十点程が出土した。

SK97 (第10図) 土坑はX42Y40区に位置し、規模は0.8×1.70mの不定形をなし、深さ数cmで土器が出土した。

(2) 奈良～平安時代の遺構

遺構は、SD02の周辺を中心に土坑15が確認され、この遺構の覆土は黒褐色土であった。

SK06 土坑はX50Y16区に位置し、平面が1.5×2.1mの楕円形。深さは10cm弱で須恵器・弥生土器数点が出土。

SK10 (第13図) 土坑はX47Y15・16区に位置し、1.7×2.5mの楕円形で、深さは15～20cmで須恵器数点が出土。

SK13 (第12・13図) 土坑はX48Y16区付近に位置し、平面が1.5×1.6mの楕円形。深さは30～40cmあり、主に黒褐色土が堆積し、中から弥生土器、須恵器が数点出土した。

SK15 (第12・13図) 土坑はX48Y13区付近に位置し、平面が1.25×1.5mのほぼ円形をなし、深さは20cmあり灰黒色の覆土から須恵器・土師器が数点が出土した。

SK17 (第12・13図) 土坑はX47Y14区付近に位置し、平面が1.7×1.7mのほぼ円形をなし、深さは20cmあり主に黒褐色土の覆土から弥生土器・須恵器が数点が出土した。

SK18・19 (第12図) 土坑はX49Y18～20区に位置し、平面が2.0×4.8mの楕円形をなしSD02と重複する。深さは底面まで30cm程で、覆土は主に暗褐色土や黒褐色土が堆積し、中から弥生土器・須恵器が20点程出土した。

SK25 (第13図) 土坑はX45Y18付近に位置し、北に数cmの浅い落ち込みがある。平面が1.0×1.2mの卵形をなし、深さは10cmあまりと浅く覆土に黒色土・黒褐色土器が堆積し、中から弥生土器・須恵器が数点が出土した。

SK26 (第13図) 土坑はX45Y20区に位置し、SK27に新しく切られる。平面が 1.2×2.0 mの半円形をなし、深さ15cmの浅い所と北側が20cmと深くなる。覆土の黒色土から弥生土器・須恵器が数点出土している。

SK29 (第12図) 土坑はX46Y19区に位置し、平面が 0.95×1.5 mの楕円形をなす。深さは20cmで須恵器が出土。

SK31 (第14図) 土坑はX42Y20区付近に位置し、平面が 0.9×1.9 mの三角形をし先端が30cm深く、南側が20cmと浅い。覆土の黒色土から弥生土器・須恵器が数点出土している。

SK32 (第14図) 土坑はSK31の北側に位置し、平面が 0.7×1.2 mの不定形をなし、深さが5cmと10cmの二とおりがあり覆土の黒色土から弥生土器・須恵器が数点出土している。

SK35 (第14図) 土坑はX40Y20区付近に位置し、平面が 1.2×2.1 mの楕円形をした一端が折れ曲がる。深さは20cm程であり、褐色上の覆土から弥生土器・須恵器が20点程出土している。

SK42 (第5図) 土坑はX35・36Y20区に位置し、平面が 1.2×2.1 mの楕円形をする。深さは25cm程で主に暗褐色上の覆土から弥生土器・須恵器が数点出土している。

SK65 (第14図) 土坑はX32Y15・16区に位置し、直径が 0.6×2.1 mの円形をする。深さは95cm程で円筒形に掘られ、覆土は暗褐色・黒褐色が堆積し③層下部から須恵器1点が出土している。

(3) 中世の遺構

遺構は溝8、土坑8、井戸1と掘立柱建物とみられるもの1を数え、覆土は暗茶褐色土・暗褐色土などが入る。

SD02 (第12・13図、図版第4) 溝は「L」字状をなし、北辺がX47・48Y9～31区に至る長さ42.5mを測り更に西の調査区外に延びる。東辺はX38～48Y29・30区に至る長さ20mを確認し、溝の延長上のSD47とのつながりは未確認である。北辺の溝は、1.2～1.6mの幅があって中間約10mの区間の他の土坑が重複する。溝の深さは西側が30cm程、東側が二段に掘られ底面まで30～40cmあり、底面の高さは西端に比べ東側が数cm低い。溝の覆土は主に暗茶褐色土が入り、遺物の出土は、全般に底面から10～20cm浮き上がった状態で検出された。また東辺の溝は、1.8mの幅があって深さは30cm程である。北東隅の溝上幅が2.5m、底面まで50cmと深く掘込まれている。遺物の出土状態は北辺と同様に遺構の上半部から、弥生土器のほか珠洲・土師質土器が出ている。

SD04 (第7図) 溝はX32～39Y35区に位置し、間が一部途切れる。幅は60～70cmで深さが7～10cm余りで、覆土は暗茶褐色土が入り弥生土器が少し出土した。溝は中世の遺構に入る覆土と似ることから同時期とみなせる。

SK36 土坑はX36Y17区に位置し、 0.9×2.3 mの不定形をする。深さは数cmと浅く須恵器・珠洲数点が出土。

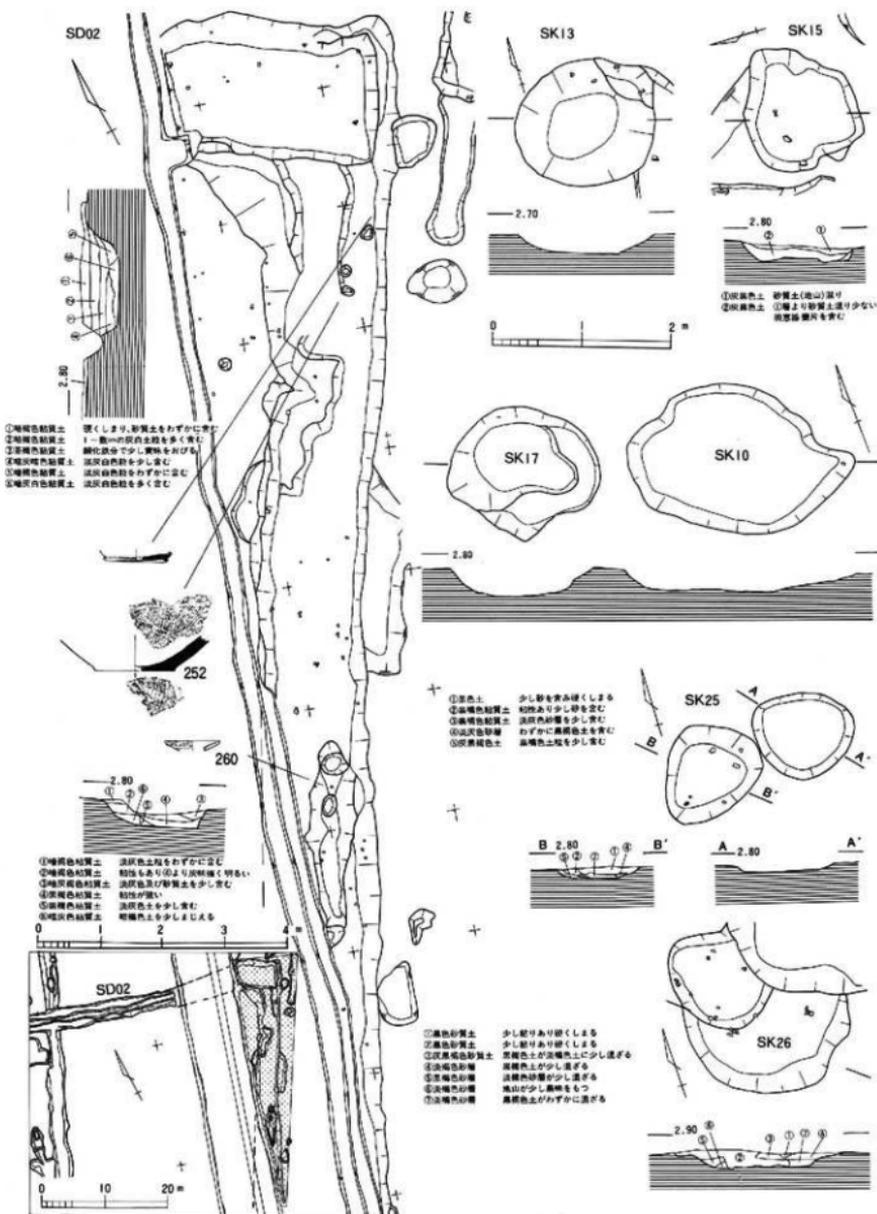
SE38 (第17図) 井戸はX36Y19区に位置し、平面が 1.6×1.8 mのはほぼ円形をなし、中央に曲物二個を入れ子にする。上の曲物は平面が 55×58 cmの高さが31cmで、下の曲物は 36×39 cmの高さが16cmあり砂層に掘えられていたが、断面でも掘り方は確認できなかった。遺物は覆土の②層から土師質土器1点が出土した。

SD46・47 (第15図) 溝は「く」字状をなして折れ、X30～38Y9～31区に至る長さ約43.0mを測る。南側の直線状の溝に沿ってSD47が長さ22m平行しているが、東西の両端は途切れる。SD46は幅が $1.0 \sim 1.6$ mで、深さが15cm程あり、わずかに東側が低くなる。溝の底面は一定せず中程が深かったりしている。遺物は少なく須恵器や珠洲が出ている。またSD47は幅が $1.0 \sim 1.3$ mで、深さが $10 \sim 15$ cm程で、覆土にはSD46と同じ様な暗茶褐色土が堆積していた。

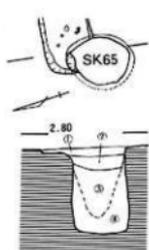
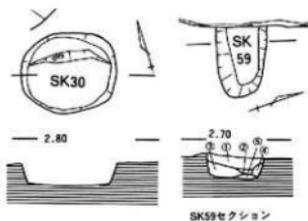
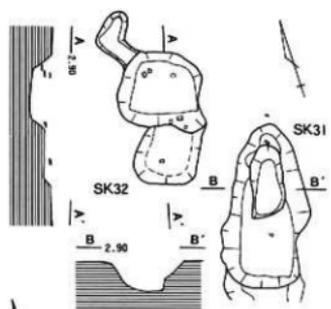
なお、X35・36Y12・13区で掘立柱建物とみられる柱穴4個がある。柱間寸法は 3.3×2.9 mの間隔で、柱穴の直径が約20cmで、深さが $10 \sim 20$ cmであり、建物の方向は北から西へ 15° 偏る。柱穴状ピットはSD55近くに点在する。

SK53 (第14図) 土坑はX31・32Y18・19区に位置し、平面が 1.5×2.1 mの長方形をする。深さは65～70cmで覆土は各層がレンズ状に入り、珠洲数点と両拳を合わせた大きさの礫層が、中層あたりから出土した。

SK57 (第14図) 土坑はX33Y19区に位置し、平面が 0.7×2.2 mの柳葉形をする。底部までの深さは25～45cmと一定しない。覆土からは、弥生土器や珠洲の片口鉢が数点出土した。

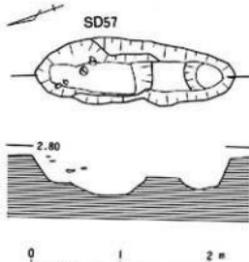
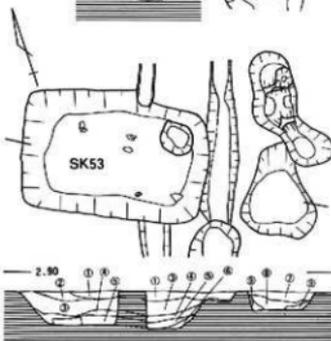


第13図 SD02 (X38~47Y29~31), SK10~26遺構図



- SK59セクション
- ①暗褐色粘質土 酸化跡中で少し蒸れおける
 - ②暗褐色粘質土 土をかきで入る
 - ③暗褐色粘質土 ①より深く掘れあり
 - ④暗褐色粘質土 ②と同様
 - ⑤淡灰色粘質土 掘り止りに少し暗褐色土混じる

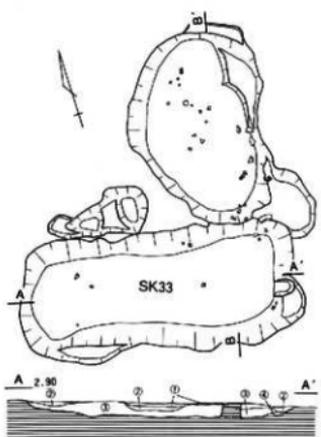
- SK66セクション
- ①暗褐色粘質土 赤化地を淡灰色土混をわずかに含む
 - ②暗褐色粘質土 淡灰色土をわずかに含む
 - ③黄褐色粘質土 赤化跡いより掘りあり
 - ④暗褐色粘質土 少し淡灰色土を混じりあり



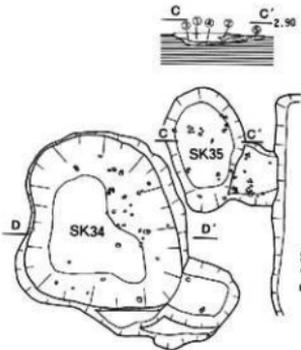
- SK53セクション
- ①暗褐色粘質土
 - ②暗褐色粘質土
 - ③黄褐色粘質土
 - ④暗褐色粘質土
 - ⑤暗褐色粘質土
 - ⑥暗褐色粘質土
 - ⑦暗褐色粘質土
 - ⑧淡灰色粘質土
 - ⑨淡灰色粘質土



- SK60セクション
- ①淡褐色土
 - ②赤色粘質土
 - ③淡灰色粘質土
 - ④淡褐色土



- A-A'セクション
- ①黄褐色粘質土
 - ②暗褐色粘質土
 - ③淡灰色粘質土

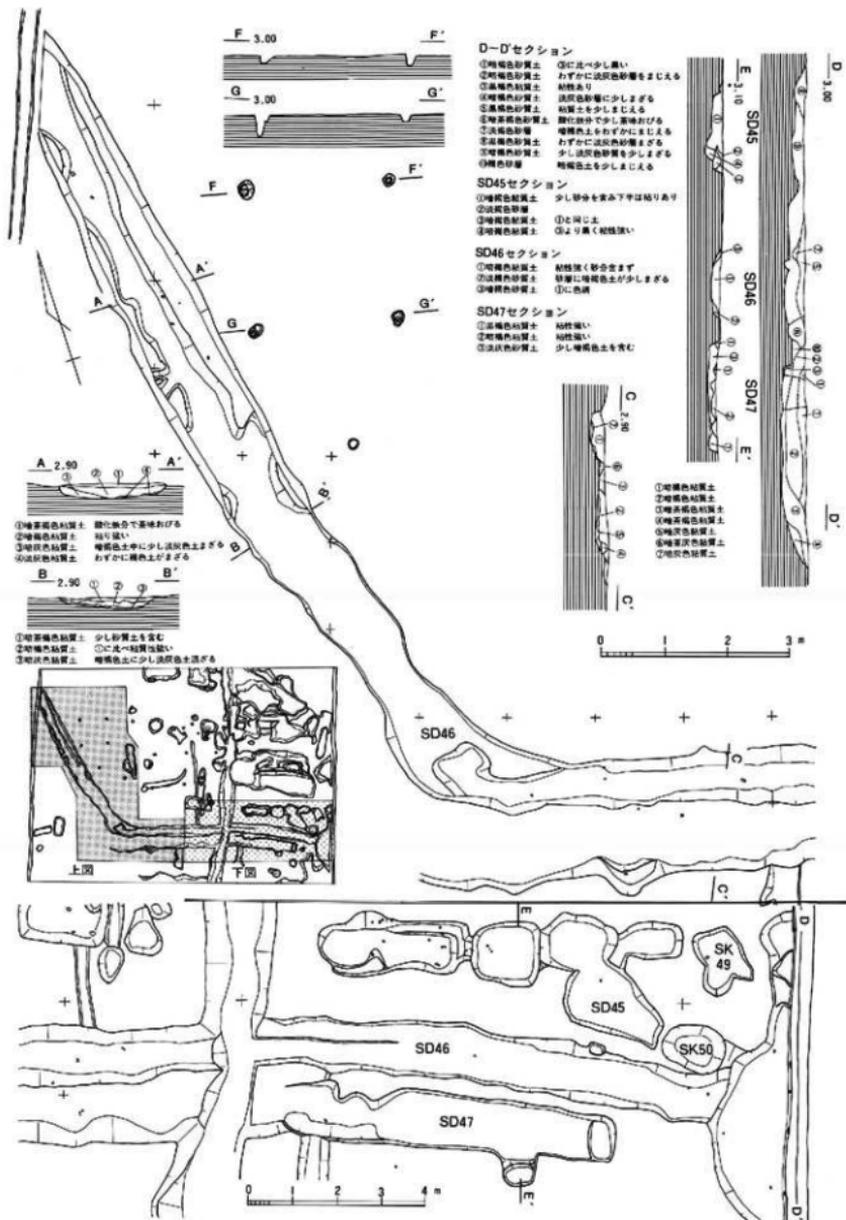


- G-G'セクション
- ①黄褐色粘質土
 - ②淡灰色粘質土
 - ③暗褐色粘質土
 - ④淡褐色粘質土
 - ⑤淡褐色粘質土

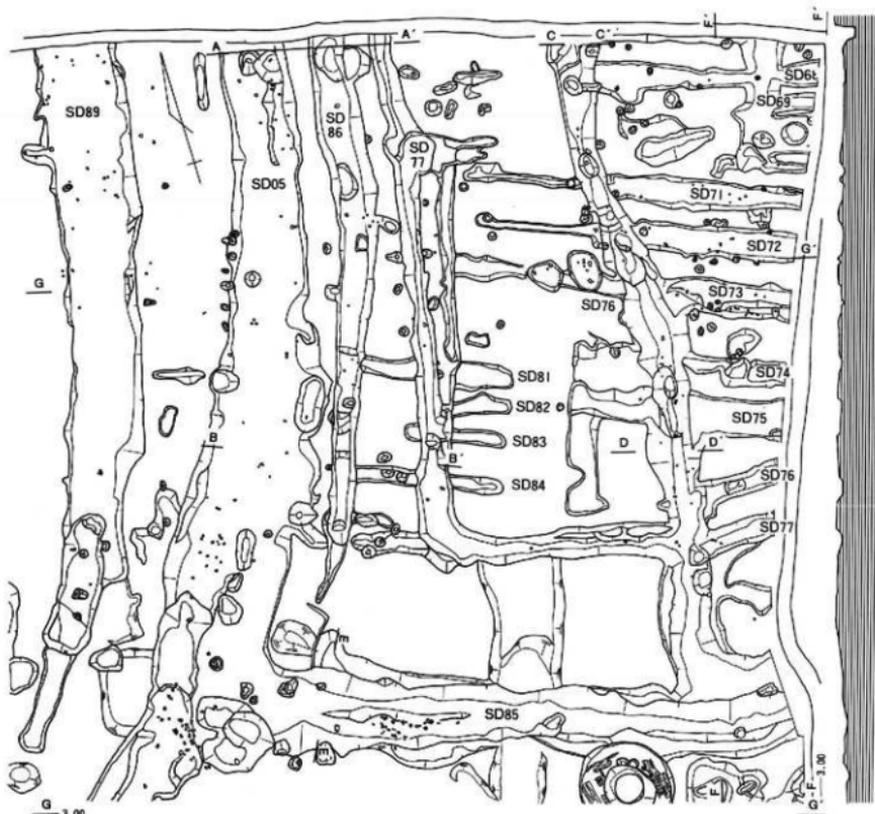
- B-B'セクション
- ①暗褐色粘質土
 - ②暗褐色粘質土
 - ③暗褐色粘質土
 - ④淡褐色粘質土
 - ⑤黄褐色粘質土
 - ⑥淡褐色粘質土
 - ⑦淡褐色粘質土

- D-D'セクション
- ①黄褐色粘質土
 - ②淡褐色粘質土
 - ③淡褐色粘質土
 - ④暗褐色粘質土
 - ⑤暗褐色粘質土
 - ⑥淡褐色粘質土
 - ⑦淡褐色粘質土

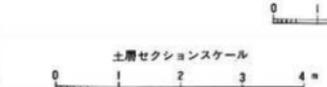
第14回 土坑・遺構図



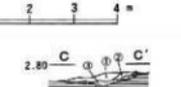
第15図 SD45・46・47遺構図



- ①暗茶褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土 ③暗茶褐色粘質土 ④暗茶褐色粘質土 ⑤暗茶褐色粘質土 ⑥暗茶褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧暗茶褐色粘質土 ⑨暗茶褐色粘質土 ⑩暗茶褐色粘質土 ⑪暗茶褐色粘質土



- ①暗茶褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土 ③暗茶褐色粘質土 ④暗茶褐色粘質土 ⑤暗茶褐色粘質土 ⑥暗茶褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧暗茶褐色粘質土 ⑨暗茶褐色粘質土 ⑩暗茶褐色粘質土 ⑪暗茶褐色粘質土



- ①暗茶褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土 ③暗茶褐色粘質土 ④暗茶褐色粘質土 ⑤暗茶褐色粘質土 ⑥暗茶褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧暗茶褐色粘質土 ⑨暗茶褐色粘質土 ⑩暗茶褐色粘質土 ⑪暗茶褐色粘質土

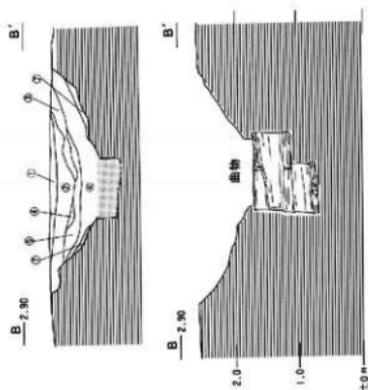
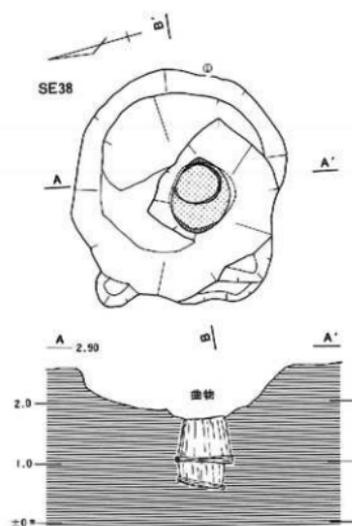


- ①暗茶褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土 ③暗茶褐色粘質土 ④暗茶褐色粘質土 ⑤暗茶褐色粘質土 ⑥暗茶褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧暗茶褐色粘質土 ⑨暗茶褐色粘質土 ⑩暗茶褐色粘質土 ⑪暗茶褐色粘質土

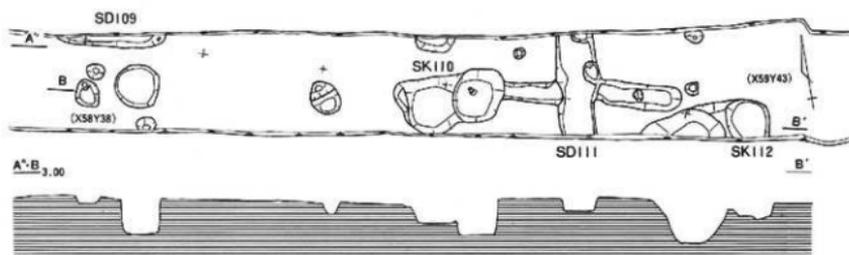
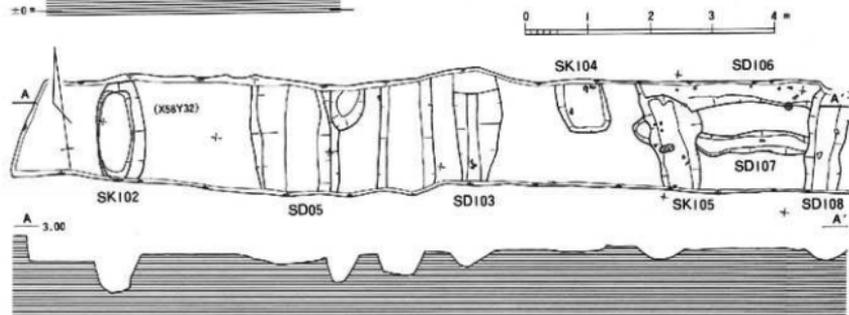


- ①暗茶褐色粘質土 ②暗茶褐色粘質土 ③暗茶褐色粘質土 ④暗茶褐色粘質土 ⑤暗茶褐色粘質土 ⑥暗茶褐色粘質土 ⑦暗茶褐色粘質土 ⑧暗茶褐色粘質土 ⑨暗茶褐色粘質土 ⑩暗茶褐色粘質土 ⑪暗茶褐色粘質土

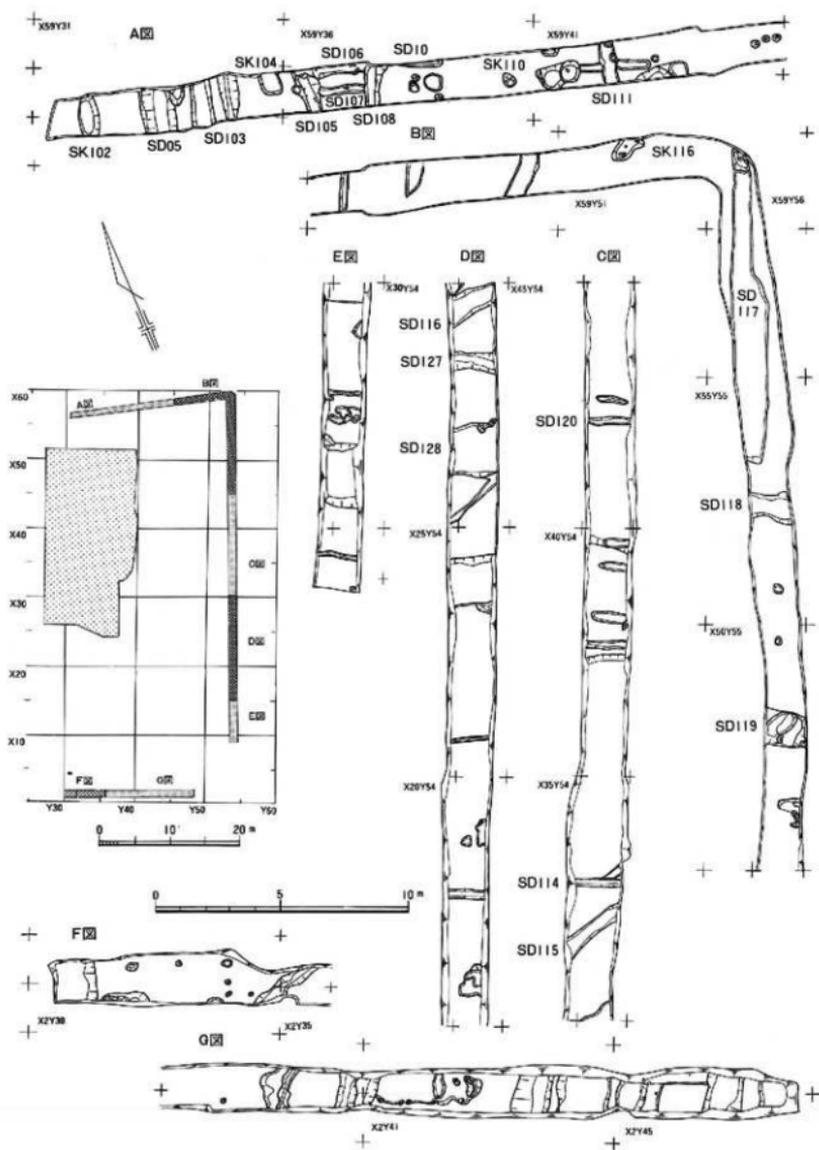
第16図 SD05・68～89遺構図



- ①赤褐色粘質土
②黒褐色粘質土
③灰褐色粘質土
④灰青色砂層
⑤灰褐色砂質土
⑥赤褐色土
⑦灰褐色砂層
- ⑧北へ露れおける
わずかに砂質土や礫み砂くしよる
少し黒褐色土を露む
ブロッコで入る
少し灰青色砂質土を露む
黒褐色土(1-2m大)を少し露む
少し黒褐色土がまざる



第17図 SE38及び水路敷きの遺構図 (X57-59Y31-44, 1/6)



第18図 用水路敷きの遺構 (1/200)

SK60 (第14図) 土坑はX25Y26区に位置し、平面が1.0×2.0mの長方形をなし、深さが30cmで遺物はない。

SD63 溝はX22Y22～26区に位置し、調査区での幅が0.9m、長さ8.5m以上あり深さ数cmで、珠洲など出土した。

SD77 (第16図) 溝はX48～54Y35～40区に位置し、「L」字状に折れ調査区外に延びる。溝の幅は50～75cmで、底面までの深さは20cm程であり、暗茶褐色土の覆土から弥生土器・須恵器・珠洲10点程が出土した。

SD79 (第16図) 溝はX47～54Y37～39区に位置し、ほぼ直線に調査区外に延びる。溝の幅は0.6～1.0mで深さが20cm程あり、一部に深い所がみられる。遺物は暗茶褐色土の覆土から弥生土器・須恵器・珠洲が少し出土した。

SD86 (第16図) 溝はSD77の西辺に隣接し、幅は北側で1.0mで南側が細くなる。覆土はSD77と似る。

SD89 (第16図) 溝はX46～54Y31～32区に位置し、ほぼ直線に調査区外に延びる。溝の幅は北側で2.0m、南側で幅0.6mと細くなり途切れる。平坦な底面までの深さは10～15cmで、覆土から弥生土器・須恵器・珠洲が出土した。

SK99 土坑はX26～28Y29区に位置し更に南西に広がる。覆土は暗褐色土が入り、須恵器・珠洲などが出土した。

SK100 土坑はX31～32Y30区に位置し、平面が1.3×3.1mの楕円形をする。深さは15～20cm程で珠洲が出土。

SK125 土坑はX45Y14区に位置し、平面が0.65×1.1mの楕円形をする。深さは5～10cm程で珠洲が出土した。

(4) 近世の遺構

遺構は溝5、土坑5を数え、遺構の覆土は淡褐色土・灰褐色土・暗褐色土などが入る。

SD05 (第16図、図版第6) 溝はX軸の方向に縦走り約57m以上を測る。溝の幅は1.5mから最大3.5m程あり、SD85以南の溝は、二段に掘込まれ両端が10cm程と浅く掘られ、中央では上幅1～2mで、遺構掘込み面から20～40cmと深くしている。またSD85以北は、底面が平坦な深さ10～15cmの溝となっていて、溝に杭を多く打ち込まれた所がSD05に2箇所(北杭群・南杭群)と、SD85に1箇所(東杭群)存在する。北杭群は12本が溝幅に1mの広さに打ち込まれる。南杭群は、30本余りが溝の交差する所に横幅いっぱい1mの間に打たれる。南杭群は、溝幅に10本が打たれる。SD05・85からの遺物は少ないが、弥生土器・須恵器・珠洲・近世陶磁器などが出土した。

SK30 (第14図) 土坑はX48Y21区に位置し、平面が1.0mの円形をなし、深さは30～40cmあり、越中瀬戸が出土。

SK33 (第14図) 土坑はX39～41Y16・17区に位置し、2個が接している。北側は2.1×3.2m、南側は1.9×4.3mの楕円形をし深さが35cmと20cmである。遺物は暗褐色土と黒褐色土から弥生土器・須恵器・越中瀬戸が出土した。

SK34 (第14図) 土坑はX38～40Y18・19区に位置し、平面が2.9×3.9mの不定形をなし、深さが30～40cmで底面が皿状をなし、遺物は暗褐色土と黒褐色土から弥生土器と少しの須恵器・越中瀬戸が出土した。

SD43 (第5図) 溝はX36・37Y21～25区に位置し、平面が4.5×8.2mの不定形をなし、底面までの深さは一定せず15～25cmの深さで、暗褐色土の覆土からの出土遺物は須恵器・越中瀬戸など少ない。

SD44 (第3図) 溝はX32～35Y21～25区に位置し、平面が4.7×10.5mの不定形をなし、底面までの深さは一定せず25～30cmの深さで、暗褐色土の覆土からの出土遺物は珠洲・近世陶磁器など少ない。

SD45 (第15図) 溝はX31Y21～25区に位置し、平面が2.5×8.3mの不定形をなし、底面までの深さは一定せず15～30cmの深さで、SD43・44と同じ暗褐色土の覆土からの弥生土器が数点出土している。

SK49・50 (第14図) 土坑はX30Y26区付近に位置し、平面が1.0m程の円形をなし、深さは20cmで遺物がない。

SD68～77 (第15図) X47～54Y36～40区に位置し、溝幅が0.3～1m、深さ5～10cmの畦状の溝である。

SD98 土坑はX27～33Y29・30区に位置し、2.1×6.7mの不定形をなし、深さが40cmで珠洲・近世陶器が出土。

(5) 用水路敷き (第17・18図、図版第7)

調査区の幅は1.4～1.8mで溝・土坑を検出した。北側ではSD115、SK116が弥生時代の遺構で他の多くが中世にあたる。東側では暗褐色土の溝から弥生土器が少し出ており、南側では溝の覆土に茶褐色土や暗褐色土が入り、若干の弥生土器の出土があった。

5. 遺物

調査により出土した遺物は、縄文土器1点、主体を占める弥生土器と石器、奈良～平安時代の土器、中近世の陶磁器があり、多くは遺構の覆土から出土している。しかし完形に復元できる土器は少ない。弥生土器は口縁部を中心とした便宜的な器種分類を行い（表紙の図）、以下、それに従い遺構ごとに説明する。

SD01（第19～25、図版第8～11） 弥生土器には壺；甕・蓋・鉢・高杯・器台がある。1～6は口縁部が短く外傾する壺Bにあたり、7～10は口縁部が強く外反し端部を面取りする壺D、11～15は口頸部が長く有段口縁をもつ壺F、14は幅広い有段口縁に擬凹線を引く壺G、17は幅狭い有段口縁に擬凹線を引く壺M、18～24は幅狭いヨコナデ調整のみの有段口縁をもつ壺Lで、22・23は内外面を赤彩する小形の壺である。30は幅広い有段口縁をもつ壺Iで、25・28・29・32はやや幅広い有段口縁をもつ壺J、35～37は台付き長頸の壺Oの体部にあたる部分であり、各種の形態をなす壺が含まれている。

38～41は近江・東海に普遍的に存在する受け口状の口縁部をもつ甕で、口縁部や体部上半に櫛状具による刻みや刺突、平行線文を入れる。43～53は有段口縁に擬凹線を引く甕で、口縁部が直立し端部を丸くおさめるものが多く、体部内面をヘラケズリし、外面はハケ目調整を行い煤状炭化物が付着している。52は口縁部が細くなり、内面に浅い爪痕が加わり、月影Ⅰ期に含まれる。62～82・96はヨコナデ調整のみの有段口縁をもつ甕で、口縁部の幅や屈曲の程度により更に細分される。54～65は有段口縁の幅があるもの。66～71は有段口縁が狭く外傾度が高い。73～75は屈曲度合の弱いもの。76は口縁部に屈曲がなく有段口縁状に肥厚させた甕Fである。

84～101は「能登形甕」と仮称された能登・越中・越後にかけ多く分布する（山島1986）甕Hで、口縁部をつまみ上げ端部を広げたものであり、内外面をヨコナデ調整する。83は軽く擬凹線状にしている。102・103は口縁部をわずかに肥厚させ有段口縁状にした甕である。また、104～111は「く」の字状外反の甕Lで、口縁部が角張るものと丸くおさめるものがある。112は半円形の把手を付けた鉢または甕の体部片にあたる。

113～128は鉢であり、124～128は底部に小さな穴を設けた有孔の鉢Eである。113・114は幅の狭い有段口縁の鉢C・Dで、114の体部は大きく張りだす。115は幅広い有段口縁をもつ鉢Bで内外面をヘラミガキしている。119は口縁部が短く外反した小形土器である。137は内面に煤状炭化物が付き上端が丸くなった高杯の脚部を転用した蓋である。

138～142は笠形をした蓋A～Dにあたり、小さな柄の138、大きな柄をもつ140、内面に返りがつく141がみられる。116・117は小形の鉢形土器であり、121は同形態の鉢のようであるが、底部のつくりが蓋の柄みと同様となっている。129～131は小さく尖った甕の底部、132～135は外面をヘラミガキした壺の底部、123は鉢の底部、136は台付きの鉢であろうか。

143～183は高杯、187～194は器台で、143～156は長く外反して伸びる杯部をもつ高杯A、157～162は小形の鉢形の高杯Bで、器面をヘラケズリ調整し赤彩したものもある。脚部には棒状有段の167～173と、裾部が大きく開く163～166、174～184の二者がある。器台には、有段の受け部をもつ187・188の器台A、長く外反した受け部をもつ190器台B、受け部が脚部から大きく開く189の器台F、脚部から小さく受け部が開く器台D・Eがみられ、191・193・194は器台の脚部で、190と191が同形態の受け部と脚部であり、193・194の脚部は185・186・192の受け部と組み合わせるとみられる。

195は砂岩を石材とした砥石であり、断面の四角くなった各面に使用した摩滅がみられる。196はひすいの表皮がついたものであり磨きはされていない。197は多面体に丸く整えた軽石であり、198は有柄の石蔵で貝岩である。

199・200は遺構上面からの遺物で、199は須恵器甕片、200は見込みみに菊花文をもつ17世紀初めの越中瀬戸である。

SD01・10（第25図） 201は台付き長頸壺で外面が赤彩されていて、無花果形の体部張り出し部の隆帯上に凹線状の沈線を4条をめぐらして1箇所の隆体上に縦方向の沈線を3条入れ飾る。213・214は有孔の鉢E、215・216は高杯脚部Aで、部分的に赤彩を行い文様効果を出している。206は壺B、204・207は有段口縁の壺K、209・218・219は有

段口縁の壺D、210・212は壺I、211は壺Lである。220は手づくねによる高さ8.2cmのコップ状をした小形の土器で、底部には外側から内側に掛けて棒の先端を刺した6箇所の跡がのこる。

SD02 (第25・26図) 遺構に混入して221~237の弥生土器、238~242の石器、須恵器が出土している。221は内面にヘラミガキをした有段口縁の壺M、222は煤状炭化物が外面に付く有段口縁の壺B、225は「く」の字状口縁部の壺I、229は高杯Aの杯部で、226は112のような壺または鉢体部につく把手である。231・234・235は棒状をした高杯の脚部で、236は擬凹線をもち、237はヘラミガキをした有段口縁の器台Aにあたる。230は蓋Dである。

238・239はかなり使われた砥石で、時期は明らかでない。240・241は加工された軽石製品であり、242は赤色の鉄石英を用いた穴が未貫通で多面体をした管玉の未製品である。他に碧玉の玉の未製品段階のものがみられる。

243~247は8世紀代の須恵器で、243は口径14.0cmの大きさの無高台の杯、244は口径15.0cm、器高4.0cmでふんばった高台が付く。246は底径6.0cmのごく低い高台が付いた小形壺の底部であろうか。247は口径13.0cmの大きさをもつ、横瓶の口縁端面が面取りされたものである。

248~254・256は珠洲の壺と片口鉢である。248~250の壺の口縁端面から頸部にかけて少し角張る断面をもつことから13世紀後半の珠洲Ⅲ期頃にあたる。254・253・256は片口鉢の底部片で、内面には幅3.0cm程の櫛状具による約10本を単位とするおろし目が引かれ、256では少し間隔をおいて引き253・254は間隔が密となっている。底部の切り離しは静止糸切りによる。257は器高4.5cmで、口径3.0cm、底径3.3cmの青灰褐色をした須恵器質に焼かれた完形の小型で、上半に淡灰緑色の自然釉がかかり、底部は1.6cmの厚さがあり、右まわりの回転糸切り痕が残る。258は乳白色をした白磁、259は蓮弁文をもつ青磁破片である。260・261は口径9.6cmと9cmの土師質土器で口縁部にタール状の油脂が付きヨコナデを行ない、260は指頭痕がのこる。262は近世の越中瀬戸の小型でであろう。

SD03 (第27図263~278、図版第12) 263~277は弥生土器であり、壺・壺・壺蓋・脚部が出ている。263は短く直立したヨコナデ調整をした口頸部がつく壺A、264は赤彩された壺の体部上部であり、265は櫛状具による擬凹線を有段口縁に巡らした端部が先細りした壺Cである。269は口縁部が少し内湾した鉢Aで、内外面をヘラミガキする。270・271はヨコナデ調整のみの有段口縁の壺Dである。272は壺I、273・274は壺L、276は壺Hに分類される。また266・267は内面をヘラケズリした壺の底部にあたる。268は赤彩した内面に返りをもつ壺蓋Cに区分される。277は低い脚部が大きく開いて、内面をハケ目調整する。278は茶褐色の鉄釉がかかった近世の小型でである。

SD05 (第27図279~304、図版第12) 279~285は弥生土器、286~289・291は8世紀代の須恵器、292~299は鎌倉時代の遺物で、300~303は近世の陶磁器である。292は口縁端部と内面に櫛状具による波状文をつけた13世紀後半の壺であり、293は壺の体部上半に波状文を加えたもの。294・295は壺のタキ調整した体部片であり、296・297はおろし目をつけた片口鉢である。298は端部が少し肥厚し丸くなった無文の青磁碗であり、299は口径12.0cm、器高2.8cmの上節質土器で口縁端部を軽くつまみ内外面をヨコナデ調整する。300は口径11.7cmで茶色の釉、302は乳灰色の釉をかけた近世の小型で、303は黒色の釉をかけた碗である。

SK06 (第27図304) 304は弥生土器で櫛状具による擬凹線を引いた有段口縁の壺である。

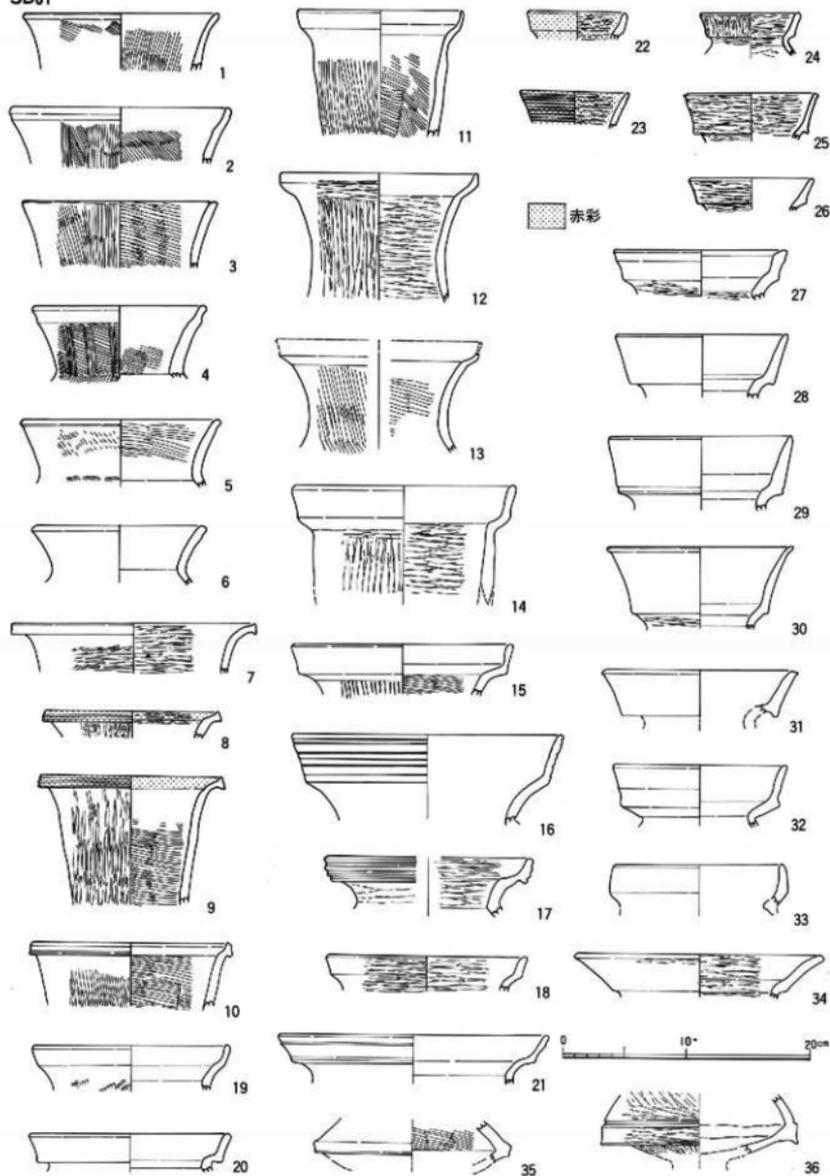
SK07・08 (第28図305・306) 図は弥生土器で、305は口縁端部が角張った壺L、306は高杯の脚部Bにあたる。

SK11・12・13 (第28図307~309) 図は弥生土器で、307・308は高杯脚部Bにあたり、307は端部に擬凹線文が引かれる。309はハケ目調整した壺の底部にあたる。

SK15・17 (第28図310・311) 図は8世紀の須恵器で、311は天井部外面をヘラケズリした杯蓋で、口縁部端部が下方に先細りして折れたもので、8世紀前葉の形態に似ている。310は内面に同心円タキをした壺片である。

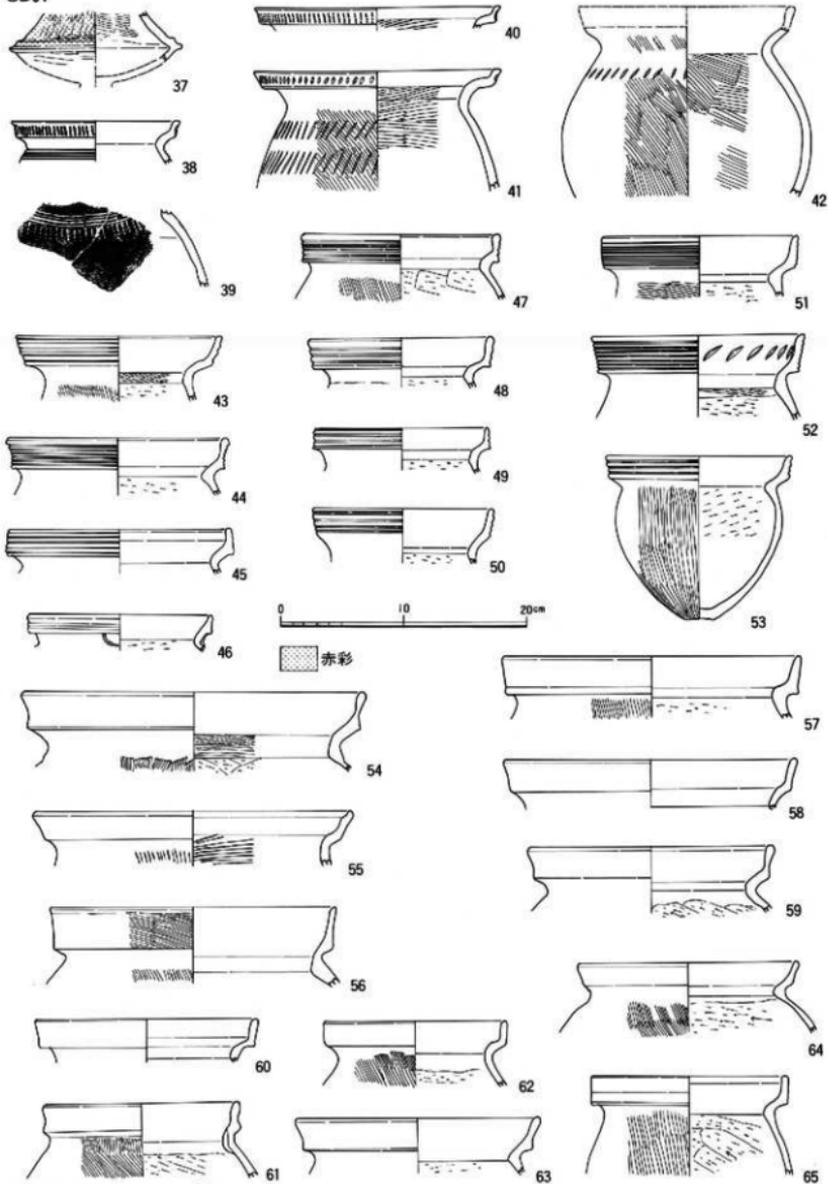
SK18・20 (第28図312~314) 図は弥生土器で、312・314は口縁部にヨコナデ調整した壺Dに分類される。313は小さくした壺の底部にあたる。

SD01



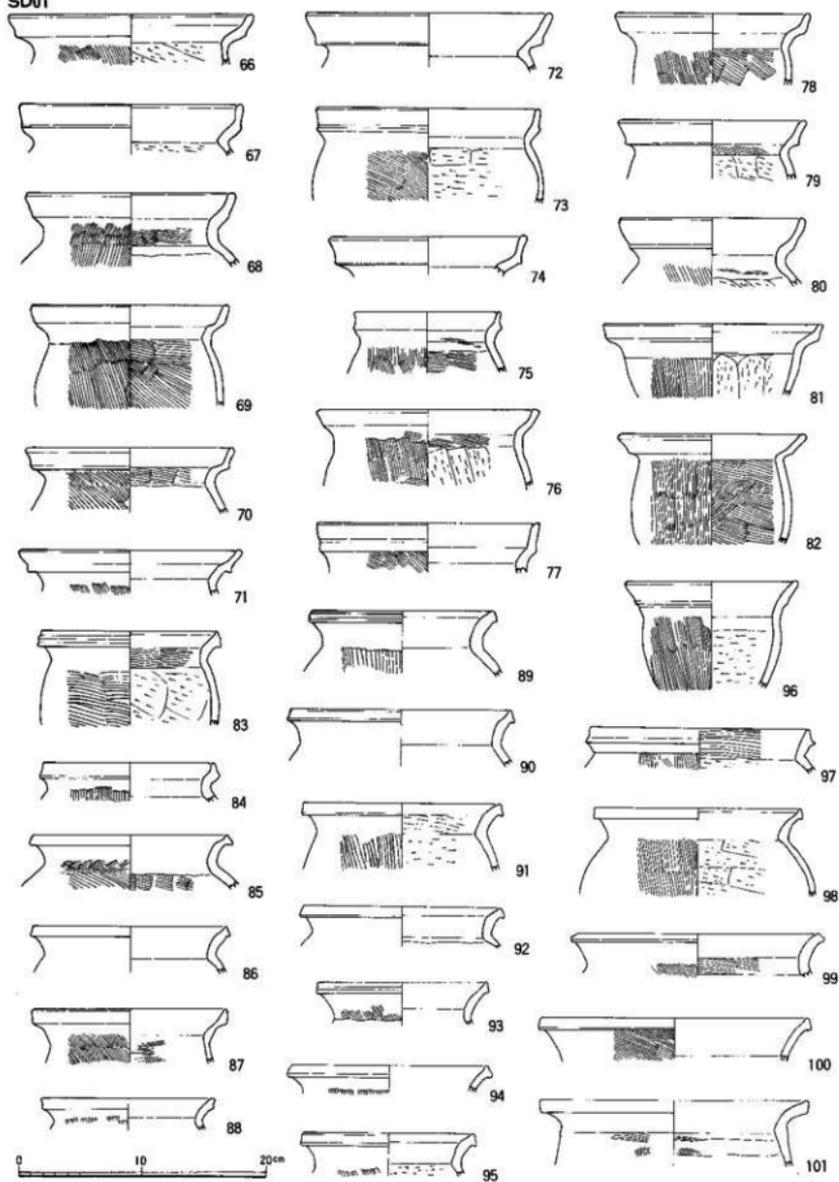
第19図 SD01出土遺物 (1/4)

SD01



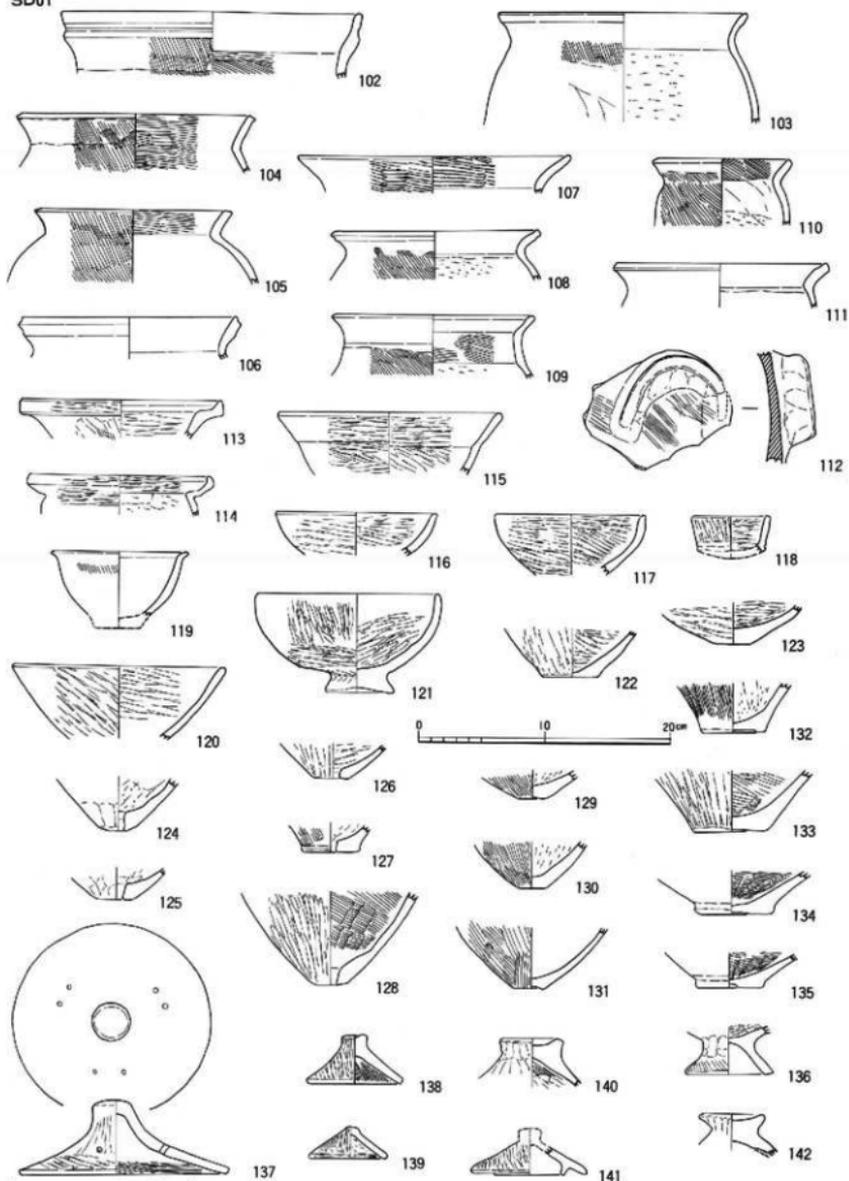
第20図 SD01出土遺物 (34)

SD01



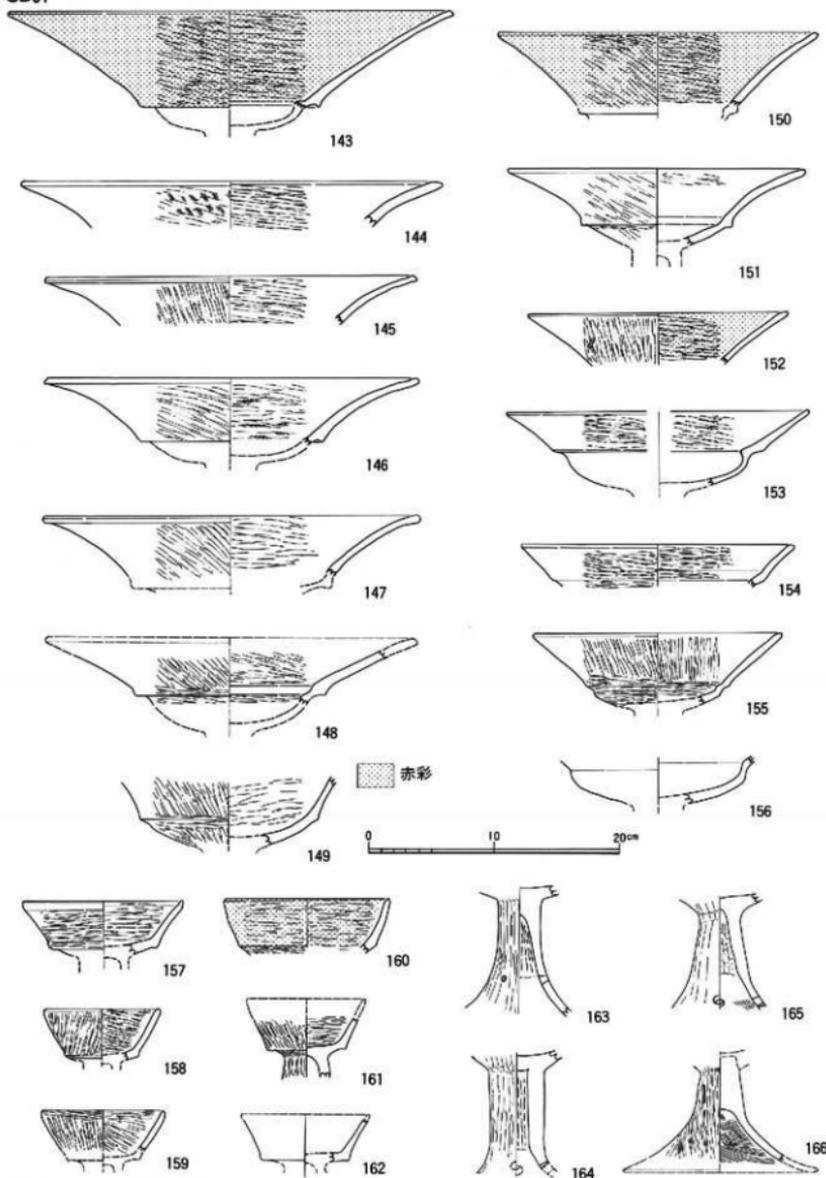
第21圖 SD01出土遺物 (¼)

SD01

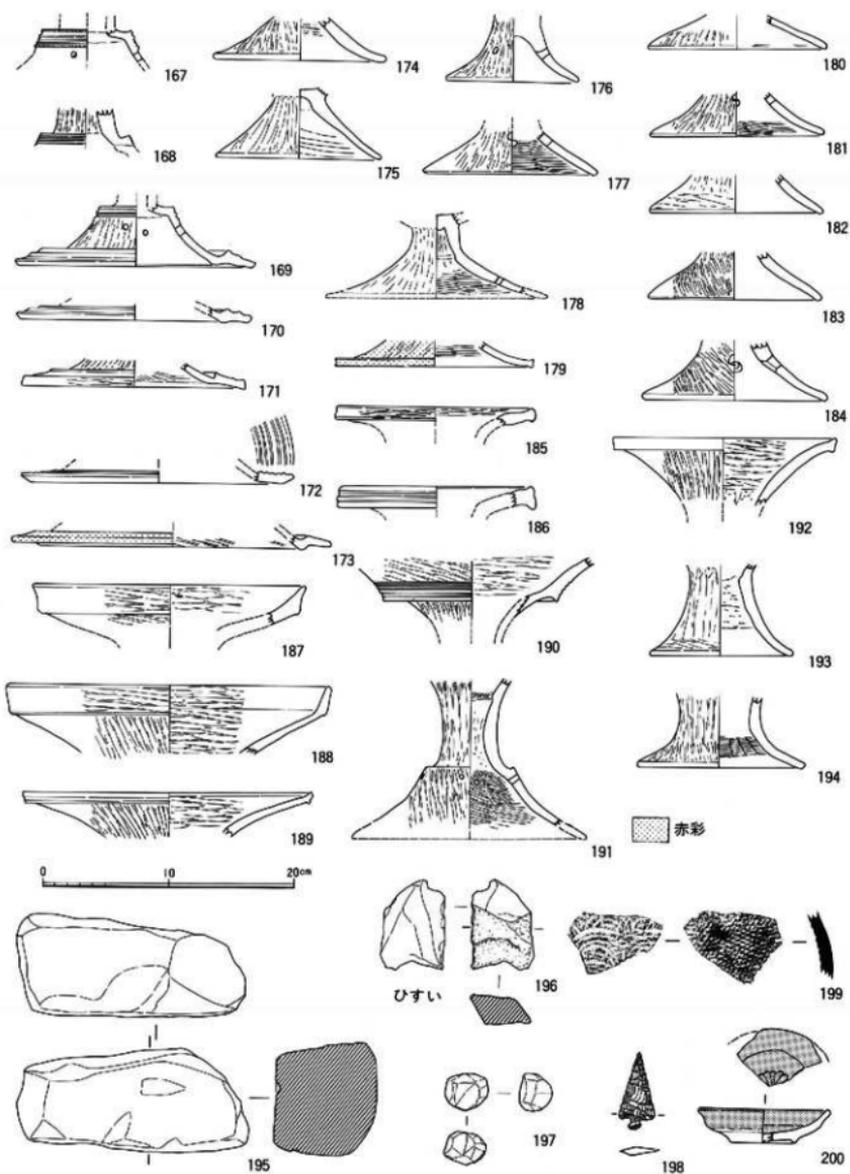


第22圖 SD01出土遺物 (1/4)

SD01

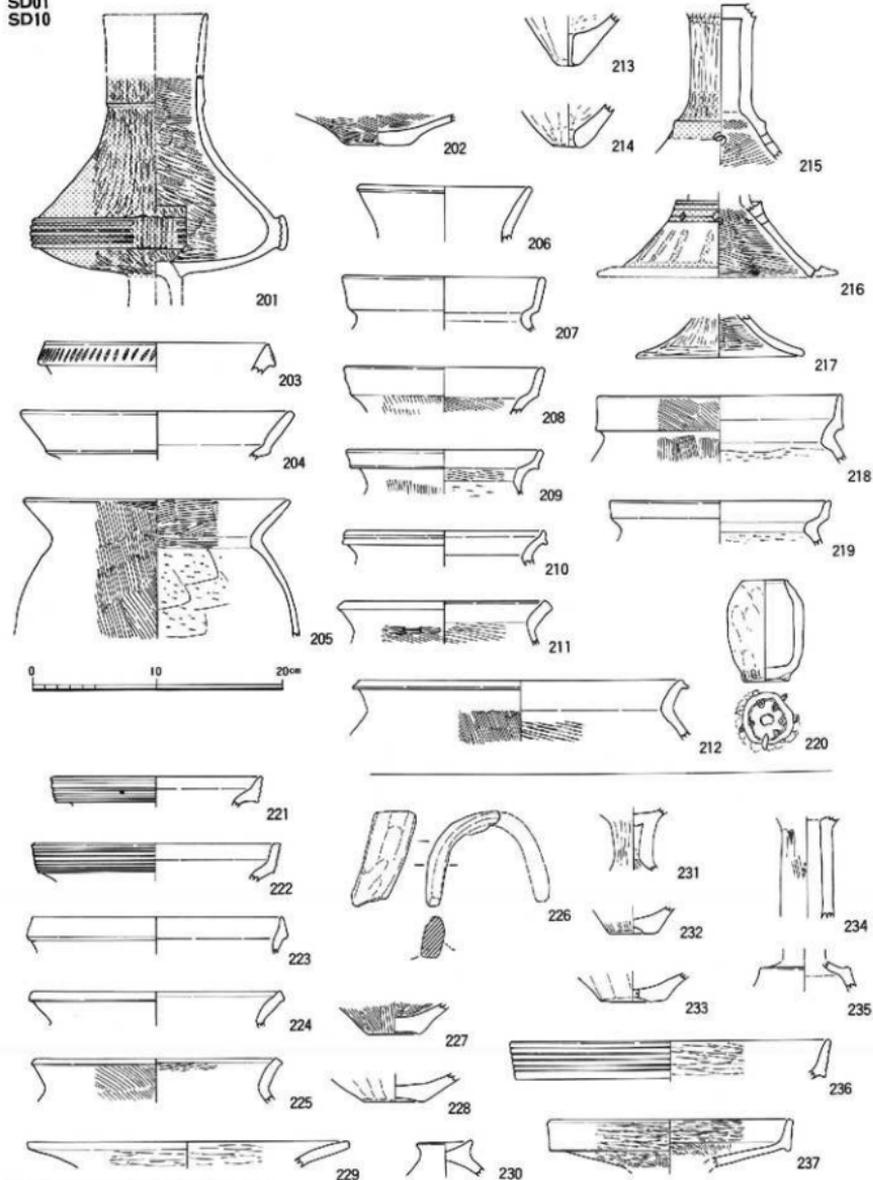


第23回 SD01出土遺物 (1/4)



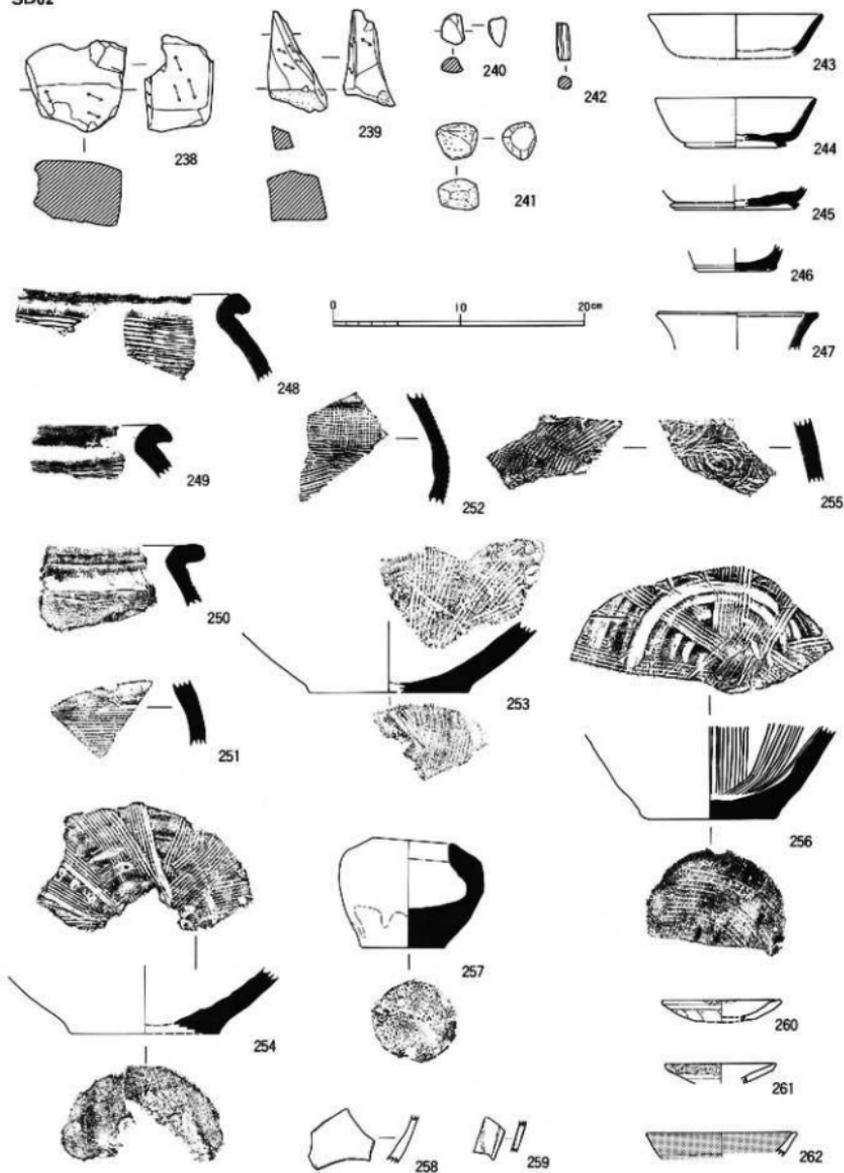
第24図 SD01出土遺物 (1/4, 198は3/4)

SD01
SD10



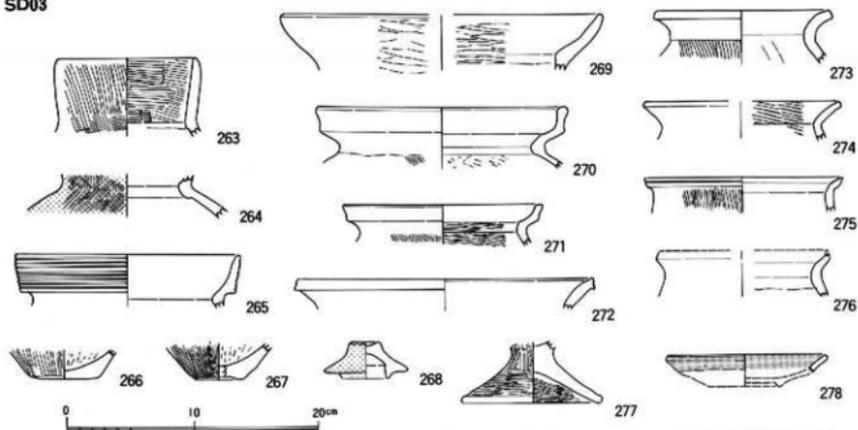
第25图 SD01・10、02出土遺物 (1/4)

SD02

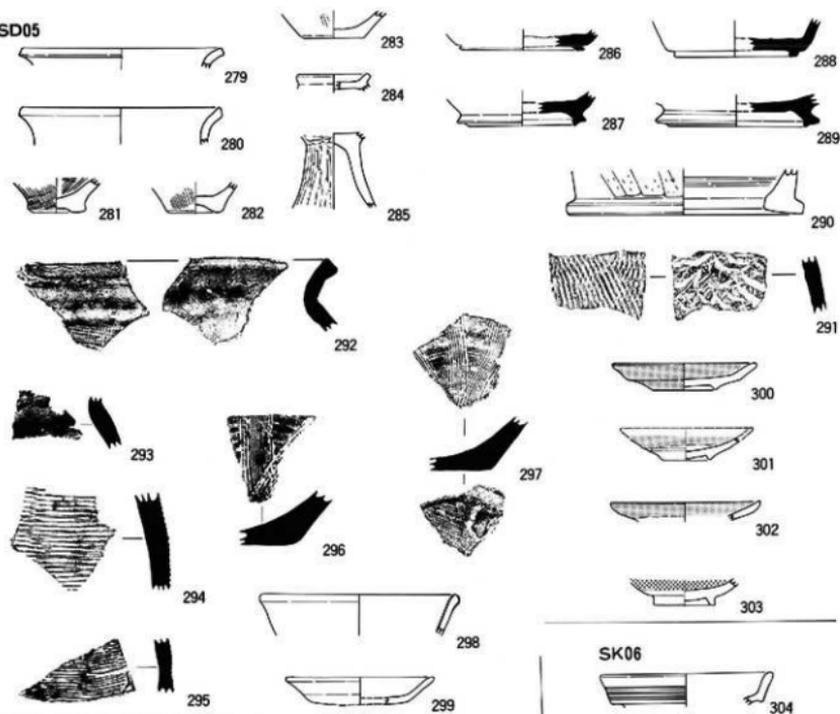


第26図 SD02出土遺物 (2/3・242(1/2)・257(1/2))

SD03



SD05



第27図 SD03・05出土遺物 (1/4)

SK07



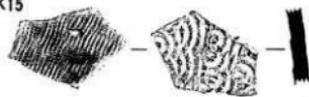
305

SK13



309

SK15



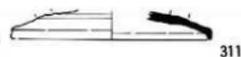
310

SK08



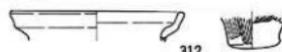
306

SK17



311

SK18



312

313

SK11



307

SK20



314

SK27



319

SK12



308

SK25



315



320

SK26



316

SK30



318



322



321

SK28



324



323

SK33



325



329



326



328



327

0 10 20cm

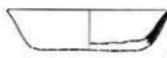


330

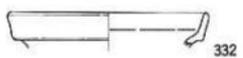
SK34



331



334



332



335



333



336



337

SK35



341



342



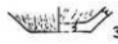
343



338



339



340



344

第28図 SK07~SK35出土遺物 (1/4)

SK25・26・28 (第28図315～317・324) 図は弥生土器で、315は煤が付いた甕D、316は甕L、317は甕Iにあたり、324は高杯の杯部であり内面に凹線状の沈線をめぐるせる。

SK27 (第28図319～323) 320・321は須恵器で、320は壺の底部、321は高台付きの杯身である。319は土師質の中心に管状の穴をあけた土錘で須恵器と同じく8世紀代のものであろうか。322・323は珠州の片口鉢で、323は13世紀後半の珠洲Ⅲ期頃にあたる。

SK33 (第28図325～330) 325・327は弥生土器で、325・326は甕D、327は高杯の脚部にあたる。328は須恵器の甕で口縁部が「く」の字状に外反したもので、329は無高台の杯身である。330は外面をヘラケズリした褐色釉を総がけした近世の陶器である。

SK34 (第28図331～339) 331～333は弥生土器で331・332は有段口縁の甕D、333は高杯の脚部にあたる。334～337は須恵器で、334は無高台の杯身、335は高台付きの杯身、336は杯蓋の口縁部、337は壺の口縁部にあたる。338は15世紀頃の青磁で、339は18世紀頃の越中瀬戸の小皿である。

SK35 (第28図340～344) 図は弥生土器で、341は甕E、342・343は甕I、334は壺Bに分類される。

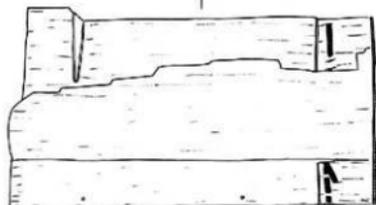
SK36 (第30図348・349) 図は弥生土器で、348は有段口縁の壺K、349は器体が開いて端面が少し肥厚した珠洲の片口鉢であり、13世紀後半の珠洲Ⅲ期にあたる。

SE38 (第29図・30図345～347) 346は井戸側面物で、345は水溜曲物にあたる。井戸側面物は底の長軸が57cm、短軸51cmの円形をなし高さ最大32cmを計る。厚さ3～6mmの側板の下方には幅8.0cmのタガが二重に取り巻き、下端に釘留のための小孔があり、皮綴じされる。水溜曲物は底の長軸が39cm、短軸36cmの円形をなし高さ最大15.6cmを計る。厚さ7mmの側板の下方には幅5.5cmのタガが一重に取り巻き、下端に釘留の小孔が付く。覆土からの遺物は347の

SE38



345



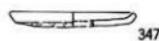
346



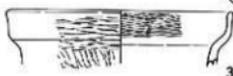
第29図 SE38出土遺物 (1/6)

SE38

SK36



347

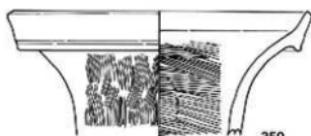


348

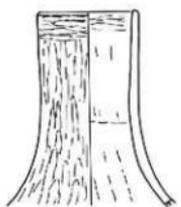


349

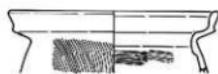
SK40



350



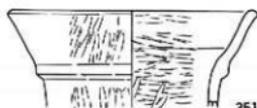
353



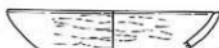
355



356



351



354



357



358



352



362



365



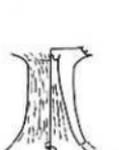
359



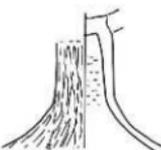
366



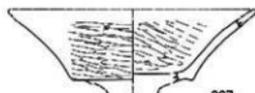
360



363



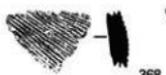
364



367



361

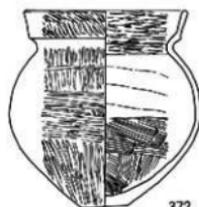


368

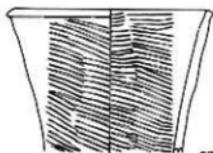


369

SK41



372



373



370



371



0 10 20cm

SK42



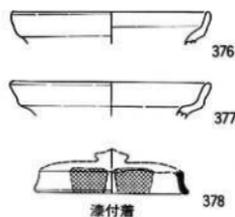
374



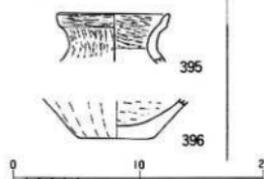
375

第30図 SE38~SK42出土遺物 (1/4)

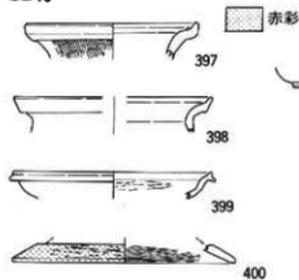
SD43



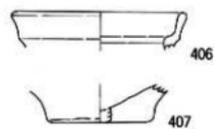
SD45



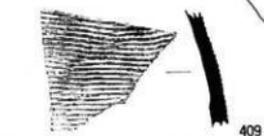
SD46



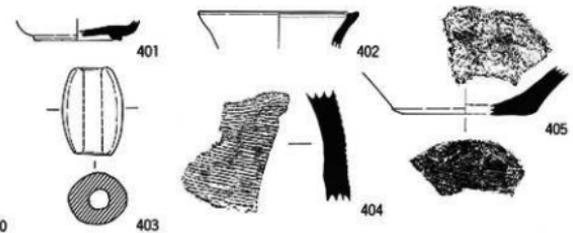
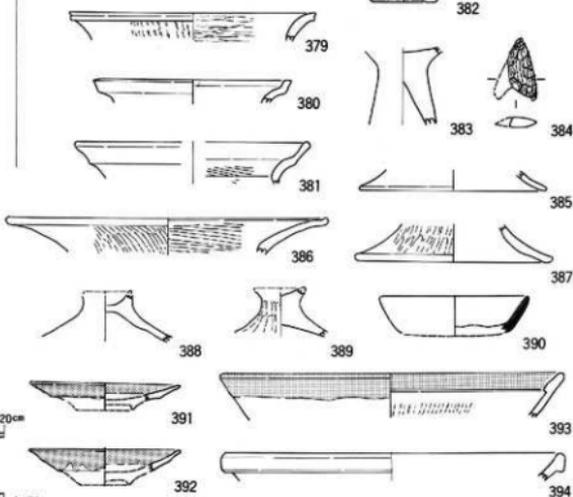
SK48



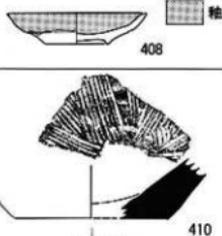
SK53



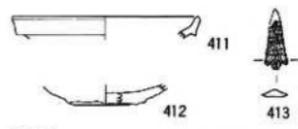
SD44



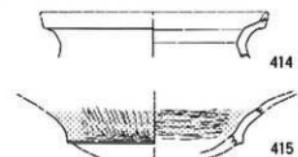
SK49



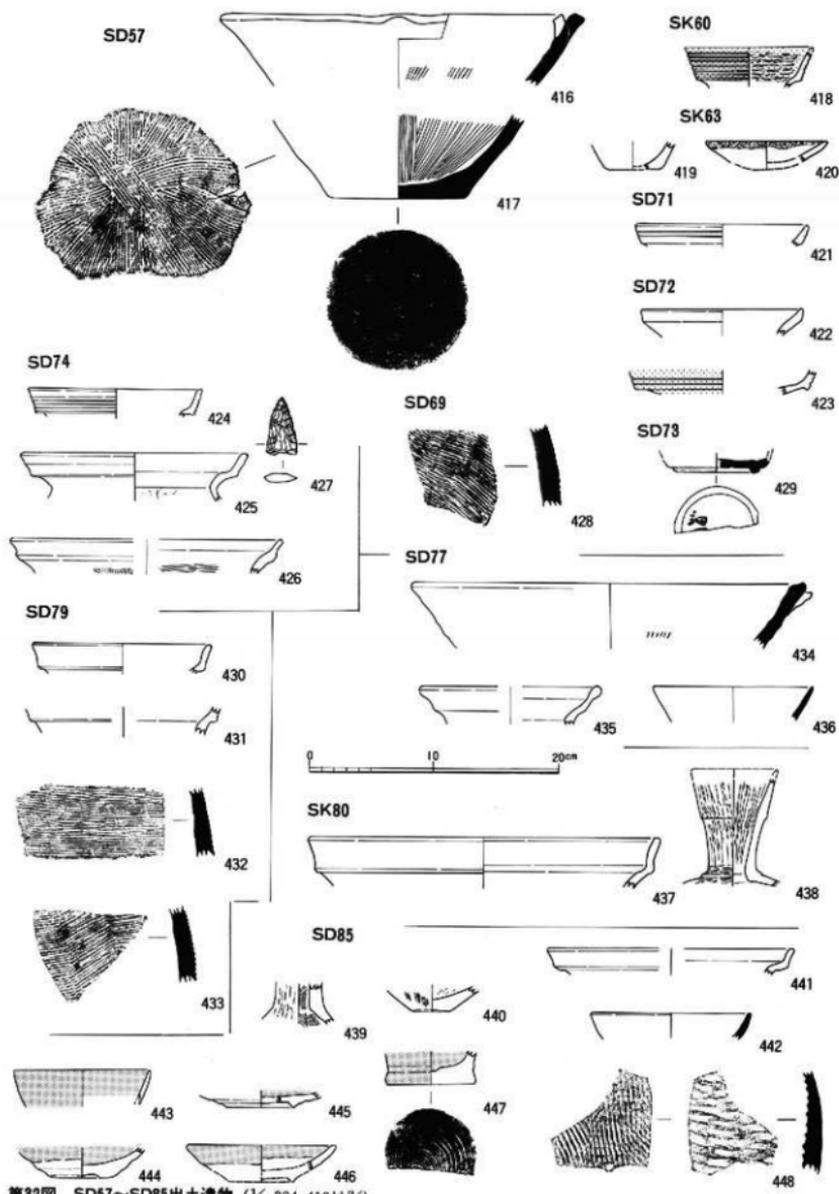
SD55



SD56

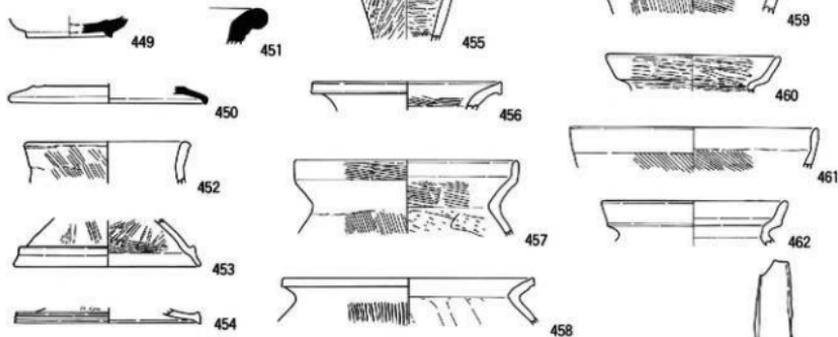


第31圖 SD43~SD56出土遺物 (×、384・413(±2%))

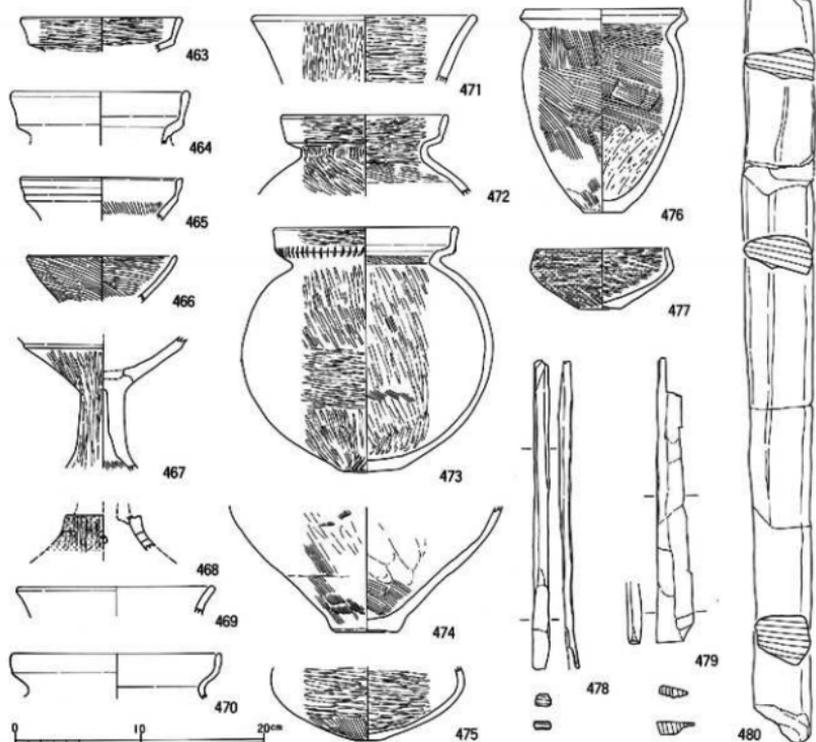


第32図 SD57~SD85出土遺物 (1/4, 384・413は1/5)

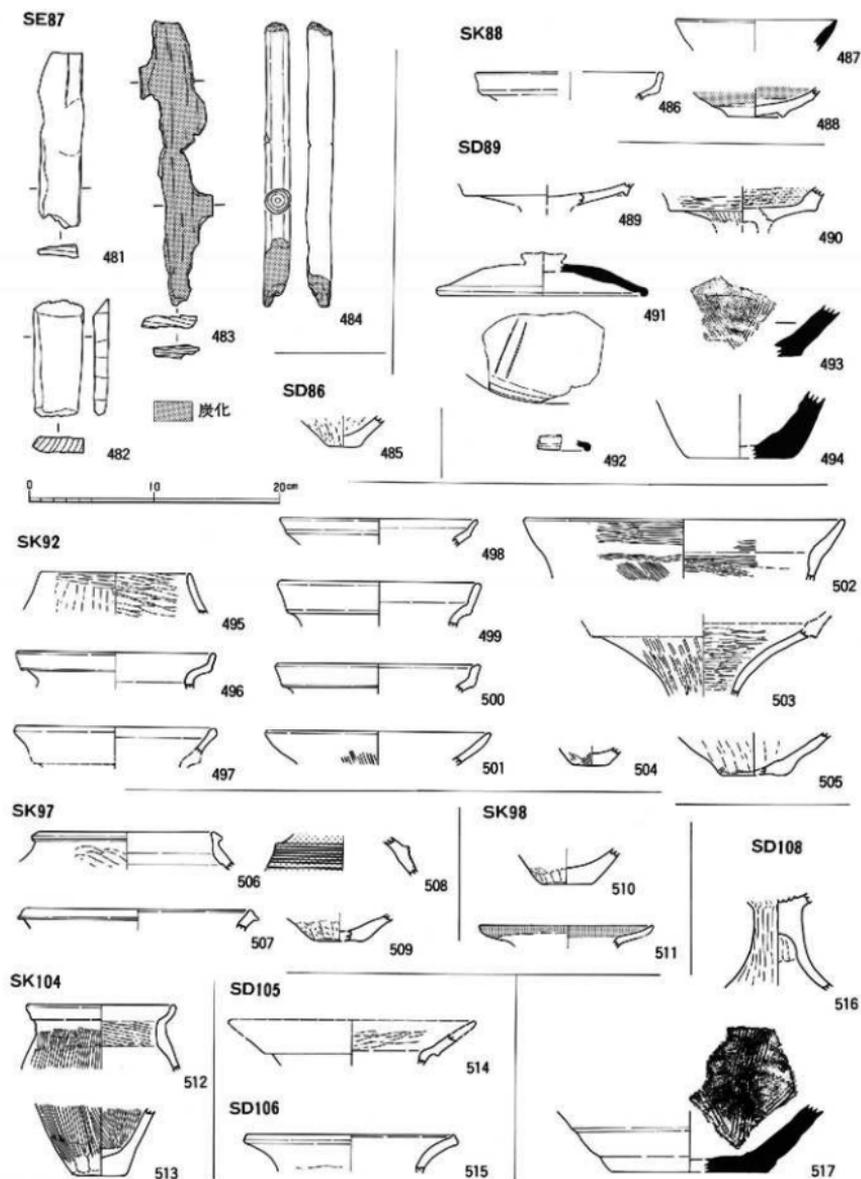
SE87上層



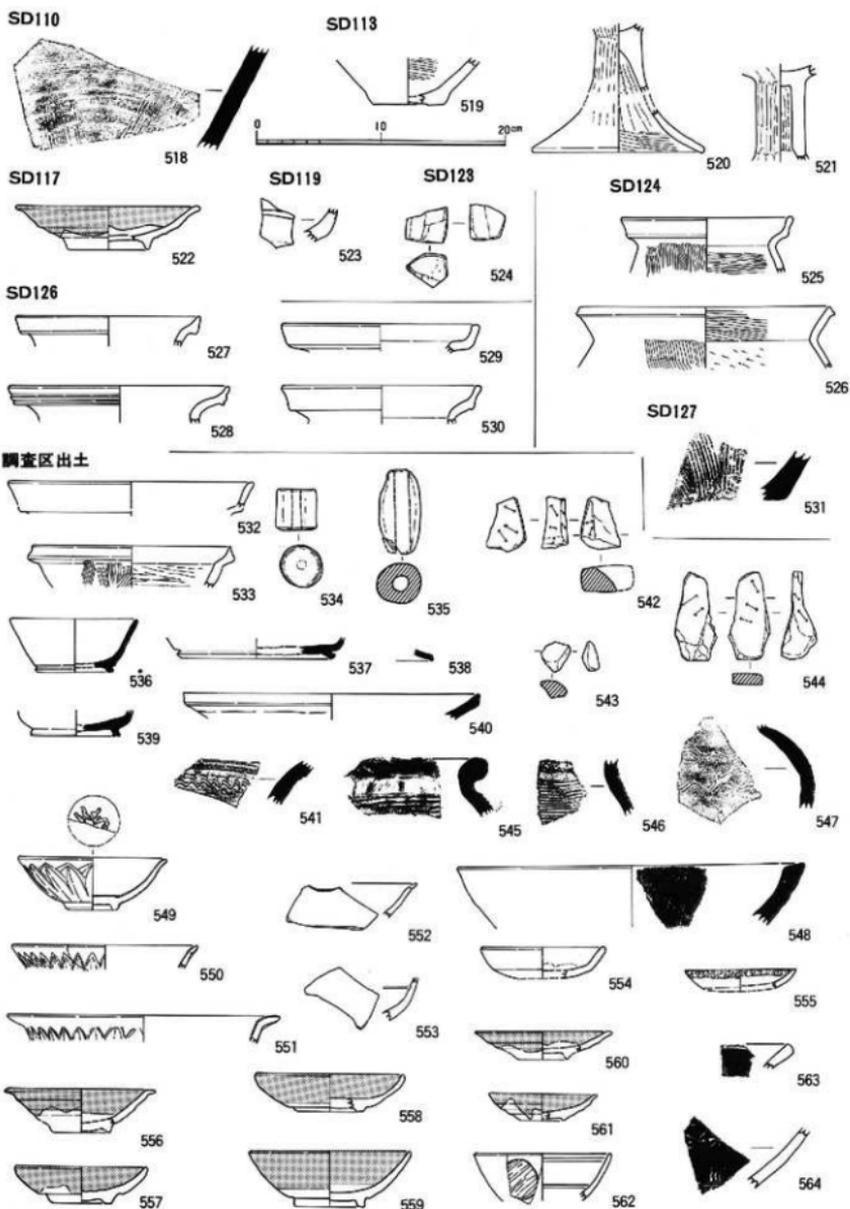
SE87底面



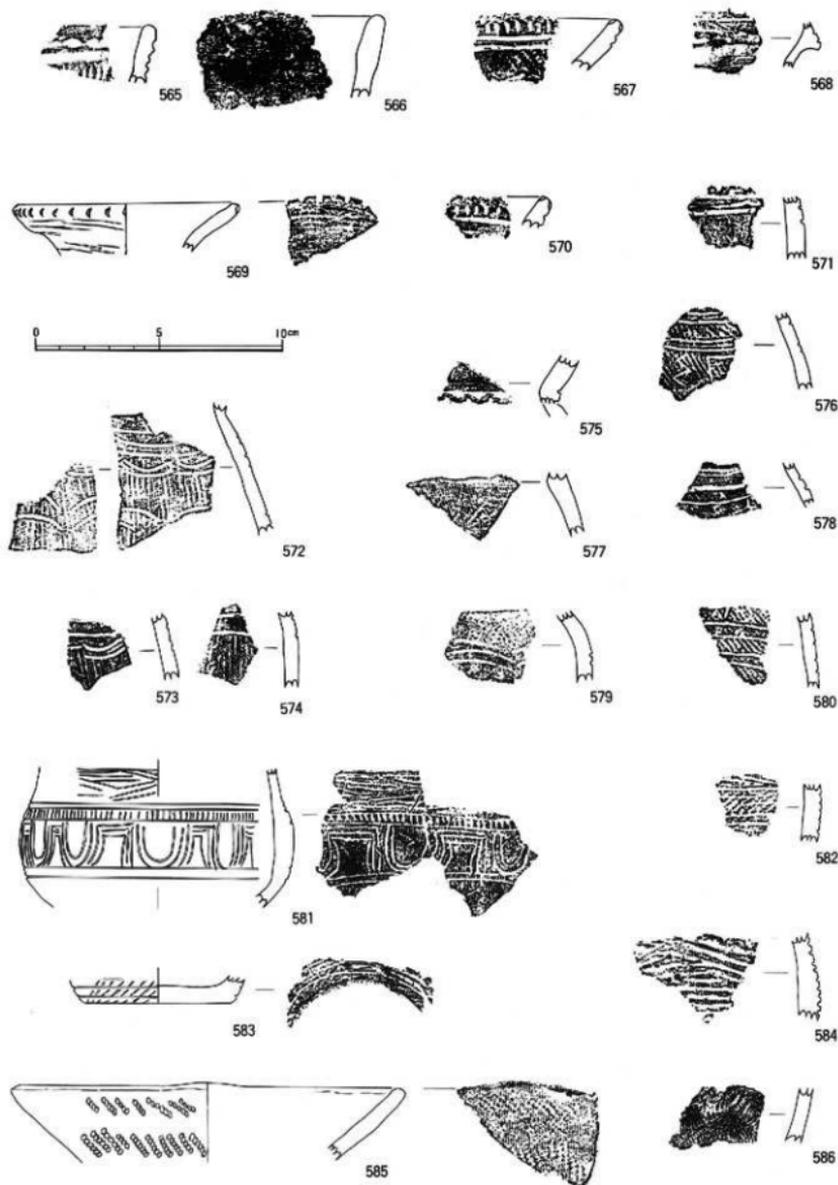
第33圖 SE87出土遺物 (1/4)



第34図 SE87~SD108出土遺物 (1/4)



第35図 SD110~SD127、調査区出土遺物 (1/4)



第36図 出土遺物 (1/2) (SD01;575・577・578・581～585・588～592・594・595SK33;595, SK33;593, SK41;576他は調査区出土)

土師質土器がある。口径は10.0cm、器高は1.7cmで、低く立ち上がる口縁部はヨコナデ調整され、外底面に指頭痕がのこる。時期は13世紀頃であろう。

SK40 (第30図350-371) 350-367は弥生土器で、350は大きく外反して有段口縁部がつく。351・352は幅広く屈曲の少ない有段口縁の壺Eに分類され、351は内外面をヘラミガキし、352はヨコナデ調整している。353は付付き長頸壺で壺Oの口頸部にあたる内面に頸部の絞り目がみられる。355・356は壺D、357は壺I、358は壺Lにあたる。359は赤彩した壺の底部。360・361は壺の底部である。365・367は高杯Aの杯部で、366は口縁部が短く形態が異なる。362-364は高杯の脚部Bで脚部が大きく開いている。368・369は珠洲で369は口縁端部が肥厚した片口鉢で14世紀の珠洲Ⅳ期頃のもので、370は土師質に焼かれた火鉢で、371は須恵器の杯身である。

SK41 (第30図372・373、図版8) 372は完形に復元できた有段口縁の壺Kで、外面と口縁内面をヘラミガキする。体部はあまり張らず器高がある。373は直線的に開く長頸の壺Cにあたる。

SK42 (第30図374・375) 374は須恵器の低い高台が付く杯身で、375は珠洲の片口鉢で珠洲Ⅲ期頃にあたる。

SD43 (第31図376-378) 376・377は弥生土器の壺D、378は須恵器の壺蓋の破片で内外面に漆が付着する。

SD44 (第31図379-394) 379-389は弥生土器で、379は壺B、380は近江・東海系の壺、381は壺D、386は高杯の杯部が口縁部、382は壺の底部、383・385・387は高杯の脚部B、388・389は壺Dにあたる。384は粘板岩の無茎の石鉢で一部が欠けている。390は8世紀頃の須恵器杯身である。391・392は越中瀬戸の小屋で394は鉢であり、393は暗茶褐色土の鉄軸がかかる鉢で、近代のものであろう。

SD46 (第31図397-405) 379-400は弥生土器で、397-398は壺H、399は鉢D、400は高杯の脚部Aの端部にあたり、401・402は8世紀の須恵器の杯身と端部を肥厚させた横敷の口縁部である。403は土師質をした中央に一孔が貫通する土鐘で、8世紀代のものとみられる。404・405は珠洲の壺片と片口鉢で、405の底部は静止糸切りによる。

SD48 (第31図406・407) 406・407は弥生土器で壺Dと壺の底部である。

SD49・53 (第31図408-410) 408は近世の灰白色の釉をかけた小屋、409・410は珠洲の壺と片口鉢である。

SD55・56 (第31図411-415) 弥生時代の遺物で、411・412は煤が付いた壺Eと底部、413は瑪瑙製の有茎の石鉢である。414も幅の狭い有段口縁の壺Eにあたり、415は赤彩された高杯Aである。

SD57 (第32図416・417) 珠洲Ⅲ期の片口鉢で、直線的に開いた口縁端部が肥厚し、414の内面に11本を単位とする密なおろし目を引き、底面の切り離しは静止糸切りされる。

SK60・63 (第31図418-420) 418・419は弥生土器で、418の擬凹線の赤彩壺と底部である。420は土師質土器。

SD69・SD71 (第31図428・421) 428は珠洲の壺片で、421は弥生土器の有段口縁壺Eにあたる。

SD72・73 (第31図422・423・429) 422・423は弥生土器で、422は壺I、423は器台Bの杯部に沈線がはいる。429は須恵器の杯外底面に低い径6.0cmの高台が付き、墨書で二字の文字が書かれるが判読できない。

SD74 (第31図424-427) 弥生土器の424は擬凹線を引いた壺A、425・426は壺Dで、427は粘板岩の石鉢である。

SD77 (第32図434-436) 434は口縁端部が水平な片口鉢、435は有段口縁の壺J、436は須恵器の杯身である。

SD79 (第32図430-433) 430は有段口縁の壺D、432・433は珠洲の壺片で、433は綾杉状のタタキ調整がされる。

SK80 (第32図437・438) 437は有段口縁の壺D、438は細頸壺の壺Nで、内外面をヘラミガキされる。

SD85 (第32図439-448) 439-441は弥生土器で、441は壺D、439は高杯の脚部、440は壺底部である。442は須恵器の杯身、448は須恵器壺片の内面に平行タタキを行なう。443-447は近世の碗・皿などである。

SE87 (第33・34図449-484、図版第8・9) 449-462は上段の掘り方からの出土である。449は須恵器の杯身、450は8世紀代の杯蓋、451は15世紀頃の珠洲の壺であり、他は弥生時代に含まれる。452は壺B、454は高杯脚部、453も脚部または鉢で、455は壺N、456は壺I、457・461・462は壺D、458は壺L、459は壺C、460は壺Kにあたる。

463～484は井戸の底面出土した。463・465・472は有段口縁の壺K、471は壺Cで、473は完形の壺Lに分類される。466は鉢E、467・468は高杯で、469は壺I、470は壺Dにあたり、476の壺Hは外面に厚く煤が付着する。477は鉢Fで、474・475は壺の底部である。478～484は小さな加工した板で、483は黒く焼け、484の棒の先端も焼ける。

SK86・88 (第34図485～488) 486は弥生土器の壺D、485は壺底部、487は須恵器の杯、488は越中瀬戸の皿である。

SK89 (第34図489～494) 489・490は弥生土器の高杯Aの杯部、491・492は8世紀代の須恵器の杯蓋で、492の内面に「=」の形をしたヘラ記号が篆刻される。493は珠洲の片口鉢の底部、494は珠洲の壺の底部であろう。

SK92 (第32図495～505) 弥生土器には壺・甕・鉢・器台がある。495は無頸の壺P、496～500は内外面をヨコナデ調整した有段口縁の壺Dで、501は高杯Aの杯部であろうか。502はハケ目調整の鉢A、503は高杯Aのように大きな受け部がつく器台で、504は壺の底部、505は壺の底部である。

SK97 (第34図506～509) 弥生土器の506は体部が張る帯Q、507は壺I、508は高杯脚部A、509は壺の底部である。

SK98 (第34図510～511) 510は弥生土器の底部で、511は近世の乳灰色の釉をかけた壺の口縁部である。

SK104 (第34図512・513) 弥生土器の512は幅の狭い有段口縁の壺Eで、513は内外面がハケ目調整の壺の底部。

SD105・106 (第34図514・515) 弥生土器の514は鉢Bで、515は壺Iにあたる。

SD108・110 (第34・35図516～518) 弥生土器の516は高杯脚部B、517・518は片口鉢の底部にあたる。

SD113・117 (第35図519～522) 弥生土器の519は壺の底部、520・521は高杯脚部Bで、512は近世の小皿である。

SD119・123 (第35図523・524) 523は青磁の碗底部近く、524は面取りした弥生時代の軽石製品である。

SD124・127 (第35図525・526・531) 弥生土器の525は壺D、526は壺I、531は珠洲の片口鉢の底部である。

SD126 (第35図527～530) 弥生土器の527は壺I、528は覆凹文を引く有段口縁の壺B、529・530は壺Dである。

調査区出土品 (第35図532～564)

532～534は弥生時代の小ピットから出土した。532は壺Dで、534は円筒形の中央に一孔設けた土鍾である。533は鉢Dで、543は軽石製品で弥生時代のものであろう。536～541は8～9世紀の須恵器で、536は口径10.0cm、器高4.5cmの小形の杯身にあたる。537は大形の杯身で、538は杯蓋の口縁部で、540は壺の口縁部に似ており、541は波状文を施す大壺の口縁部である。535は細長い形の土鍾で、542・544は砥石であり、8世紀以降に属するであろう。

545～548は珠洲で、545は珠洲Ⅲ期頃の壺、547は体部上半に波状文をつけた壺、548は珠洲Ⅳ期頃の片口鉢である。549～551は龍泉窯系青磁で外面に蓮花文をもち、549の碗は内面に草花文の印文をもつ。550折縁の皿または盤で、13世紀頃のもの。553も青磁で、552は上方断面に漆が付着した白磁である。554・555は土師質土器で、554の口縁部内外面にヨコナデ調整をし底部は型押しによる器面がのこり、13世紀頃であろうか。555の灯明皿として用いたタール状の油脂が付く。

556～564は近世の陶磁器である。556は折縁の皿、557・558は削り出し高台の小皿、559は削り出し高台の碗で、内底面の円形台状部の軸がはがれているもの。560・561は口縁部が外反する皿、562は染め付けの伊万里の碗、563・564は備前の象眼の皿である。

天王山系の土器 (第36図567～586) 565は縄文時代中期後半の土器で、566は条痕文の深鉢である。

天王山系の土器は20点程がSD01・SK33・SK41と調査区内から弥生時代末の土器とともに出土した。567・570は口縁端部に寛刻みを両面にいれる。壺の568は有段の上下に平行沈線を引き、571・575には2条の沈線を挟んで交互斜突を加え、同一個体の572～574や578・579には沈線下に二重の連続弧線が施す。また581の壺と584には菱形の沈線がみられる。土器の色調は585の浅鉢や568・569・572・578の壺が淡黄褐色をなし、他は暗茶褐色で煤の付着したものが多し。これらの天王山系の土器は細い沈線により施文されていて新しい段階のものであるが、弥生時代後期の土器の共伴から所属時期がかなり限定される。

IV まとめ

戸破若宮遺跡は射水平野の標高約2.8mに立地し、弥生時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代にかけての各種の遺構・遺物が検出された(第37図)。

1. 弥生時代(器種は表紙を参照)

遺物 弥生土器には、壺・甕・高杯・器台・鉢・蓋などの器種があるが、全形を窺える土器は少ない。土器の形態から所属時期は、後期後半の法仏Ⅱ式から月影Ⅰ式並行期にかけてのものである。

壺には長頸壺C、有段の長頸壺F・H、短頸壺A・B、広口有段壺K・L、細頸壺Mなど各種の形態が存在する。白付き長頸壺Oは、無花果形の体部張り出し部に隆帯がついた法仏期の形態をなしたものと〔宮本1986〕、小形化した体部をもつ月影期のものも含まれる。

甕は、構状具による擬凹縁文の有段口縁のA～D、ヨコナデ調整のみで無文の有段口縁のE～G、「く」の字口縁のH～Mがあり、SD01での出土割合は、大まかに擬凹縁文のもの約15%、無文のもの約45%、「く」の字口縁のもの約40%であり、そのうち能登壺と呼ばれるものが半分を占めている。近江・東海系の甕は、受け口状口縁をもち県内の各遺跡でわずかに共存している。

高杯は、時期差による形態変化が少ない杯部が逆台形をした小型高杯Hと、杯部の口縁部が発達し外傾度の顕著さが時期差を反映する目安となる高杯Aがある。体部と口縁部の比率は法仏Ⅱ期が3:2、月影Ⅰ期が1:1ないし口縁部が長くなる傾向がみられる。器台は有段の受け部に棒状有段脚が付く法仏Ⅱ期のBと、短い有段の受け部をもつ月影式に特有な形態の器台Aが多く存在する。

石器には、石鏃5点、軽石製品4点、ひすい削片1点、玉つくり用の碧玉や赤色の鉄石英の削片・石核約30点、管玉の未製品数点、砥石1点が出上している(図版第13の1)。玉製品は完成品がないが、未製品段階のものが存在しており、他の遺跡と同様に集落内に石材を持ち込みその製作が行なわれたことを示している。

遺構 遺構は、調査区を縦走するSD01の直線的に伸びた溝を中心とし、弧状に湾曲した溝や1～2m程の大きさの土坑、素掘りの井戸が調査区の広い範囲からみつまっている。全長が約68m以上の規模をもつSD01からは、使用後の細かな土器片が溝のほぼ全域から検出された。また調査では竪穴式住居は確認できなかったが、SX40の浅い掘込みからまとまった出土状態があり、その他土坑や短い溝などがかなり広がりをもって存在している。この内SE87は二段の素掘りの井戸で、上段に下方の穴を四角く囲むように板を敷き並べたもので、中世の素掘りの井戸と形態上は大差が認められない。弥生後期後半の井戸は、小杉町で3例目に当たる。針原東遺跡の2例や三谷遺跡の1例は、井戸側は直径数10cmから1m弱の木の中を削り貫いて用いており、上市町江上A遺跡でも同様の加工材を井戸側に使用していて、各遺跡の土質の違いにより井戸の構築方法が異なっている。

下条川流域の弥生時代の遺跡は(第1図)、白石・高寺・伊勢領・二の井・干田遺跡が報告されていて、遺跡の形成時期は、いずれも弥生時代後期の法仏期から月影期にかけてにあたり、近接する射水丘陵中およびその周辺の遺跡でも開始時期が同じような傾向が見受けられる。下条川流域及び周辺では、稲作農耕を基盤とした弥生時代の遺跡の開始が後期に集中していて、谷部や平野部での開墾による定着が庄川流域の弥生時代中期よりも少し遅れて開始されている。県内では、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて平野部や丘陵裾部に遺跡数が多く存在することが知られており、それらの動向にそった各遺跡の形成といえる。

2. 奈良～平安時代

遺物 遺物は8世紀半ばから後半の須恵器を中心とし、杯・壺蓋・横椗・甕・甌・土鍾などがある。杯身の外底面には字義不明であるが墨書した須恵器も出土している。

時代と遺跡		遺構の分布	出土遺物の種類	遺構名
旧石器 縄文時代 弥生時代	早 前 中 後 晩		深鉢 	SD:溝 SK:土坑 SE:井戸
	前 中 後		壺 (近江・東海系) 壺 (東日本系) 鉢 高杯 土鐘 軽石製品 ひすい 管玉 やじり 0 10 20cm	SD01 SD03 SK07 SK08 SK40 SK41 SE87 SK92 SK97
	4世紀 5世紀 6世紀 7世紀 8世紀			(須恵器) 杯蓋 壺蓋 (源行壺) 壺 杯身 墨書土器 壺 土鐘 土鐘
奈良・平安時代	9世紀 10世紀 11世紀 12世紀		(珠洲) 壺 壺 片口鉢 (すり鉢) 土師質土器 片口鉢 青磁 (輸入磁器) 小壺 片口鉢 青磁	SD02 SK36 SE38 SD46 SD47 SK53 SK57 SD77 SD79 SK99 SK100
	13世紀 14世紀 15世紀 16世紀			(井戸側) 曲物 0 10 20 30cm (曲物スケール)
江戸	17世紀 18世紀		(近世陶磁器) 碗 伊万里碗 越中瀬戸皿 皿 唐津 	SD05 SK30 SK33 SK34 SD44 SD45 SD66 SD98

第37図 時期ごとの遺構・遺物

遺構 遺物は調査区全体から出土しているが、遺構は西側に片寄より土坑15が検出された。土坑の規模は1～2m程の大きさの楕円形で、深さが10～30cmと浅く、遺物の伴出も少なく土坑の性格は明らかではない。

3. 鎌倉～室町時代

遺物 遺物は珠洲の甕・壺・片口鉢、八尾窯の甕、土師質土器、中国からの輸入磁器である青磁・白磁などが出土している。珠洲は13世紀後半の珠洲Ⅲ期のものが主体をなし、14世紀の珠洲Ⅳ期のものや15世紀のものも一部含まれる八尾窯〔酒井1985〕は13世紀後半から14世紀にかけて採集された窯跡で、当遺跡では甕の体部片が数点出土している。土師質土器は10点程と少ないが3形態がみられ、半数程が灯明皿として利用されている。1点だけ16世紀の土器があり他は13～14世紀にかけてにあたる。青磁は13～15世紀にかけての龍泉窯系の碗・皿または盤がみられる。

木製品にはSE38の井戸側に用いられていた曲物2個がある。曲物は底面に釘留の小穴が付いていて底板を抜いて井戸側に当てられている。

遺構 遺構には溝5・土坑10があり、遺構の比較的に集中する地区が2箇所存在した。SD02・46は同一の溝として確認していないが、「L」字状に折れ曲がる幅1～1.6m、長さ40m余りの溝である。溝が掘り込まれた目的は不明であるがSD46の北側では、1×1間の竪柱建物1棟と柱状ピットが少し存在していて、何らかの建物が存在していたと思われる。この周辺にはSE38・SK53・SD57などの遺構が集中していて、小規模な居住空間として活用されていたとみられる。遺構の分布状態からSD46がこの居住空間を区切る溝だった可能性もある。

また、調査区の北東側にも中世の溝3本がみられ、溝の方向が似たような方向を示しており、5m程隔てた用水敷きでも中世の土坑が発掘されていて遺構が集中している。しかし明確な建物はこの地区で検出していない。

4. 近世

遺物 遺物は、17～18世紀にかけての越中瀬戸を中心に伊万里・唐津が出土している。

遺構 遺構は溝と土坑5が検出されている。SD05・85の溝には、3箇所にも木杭群が存在していて、杭の周辺にかなりの砂が堆積していたことから水量を調整するために杭が打ち込まれたものであり、この溝が用水路としての機能を有していたと思われる。またSD43・44・45などは、溝の形状が不規則で出土遺物も覆土へ混入しており、溝の機能ははっきりしない。

引用・参考文献

- イ 石川考古学研究会 1986 「シンポジウム『月影式』土器について」
上野 章 1992 「小杉町白石遺跡発掘調査概要」 小杉町教育委員会
上野 章 1991 「4. 射水丘陵の弥生・古墳時代の遺跡」 大塚13号 富山考古学会
- キ 木倉豊信 1969 「Ⅱ 郷土文化の黎明・Ⅲ 荘園の発達と村の起り」 小杉町史
久々忠義 1986 「富山県における『月影式』土器について」『シンポジウム『月影式』土器について』
石川考古学研究会
- タ 田嶋明人 1986 「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター
- ミ 宮本哲郎 1986 「装飾器台等の展開—これまでの検討から—」『シンポジウム『月影式』土器について』
石川考古学研究会
- ヤ 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」 北陸の考古学 石川考古学研究会
- ヨ 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通②」 『考古学研究』第28巻第2号 考古学研究会
- 吉岡康暢 1989 「珠洲の名陶」 珠洲資料館

小杉町戸破若宮遺跡とその地下の化石珪藻について

富山県埋蔵文化財センター 邑本 順 亮

1. はじめに

小杉町町民第2体育館の建設に先立って行われた戸破若宮遺跡の発掘調査の際に、土層サンプルを採集する機会があり、その中に含まれる化石珪藻を検鏡した。また、その地盤調査の際に採取された地下20mまでの試料を調べることができた。珪藻分析は未だ十分終えていないが、現時点で分ったことを簡単に報告する。

珪藻はあらゆる水域に成長する単細胞植物であって細胞の殻が珪酸 SiO_2 で出来ていることから、植物が枯死した後も殻が化石として地層の中に保存されることが多い。しかも、珪藻群集は、その生育している水域の環境によって種の組成に違いがあることから、逆に地層の中に含まれる珪藻群集を解析して堆積当時の水域環境を復元しようとするのが珪藻分析である。

今回は、入手した試料について堆積時の環境のうち特に海水の影響があったかどうかを検討することを目的とした。

2. 試料とその処理

試料は平成3年6月3日、戸破若宮遺跡で井戸跡で垂直に約10cmごとに23点採取した。試料は、写真(図3・図4)に示すように、底を抜いた缶ジュースの空き缶を壁面に直角に打ち込んで試料を抜き取る方法で200~250g程度採取した。

また、ボーリング試料は共栄興業株式会社によって平成3年1月31日~同3月11日にボーリング調査が行われ、小杉町へ調査報告書に添えて提出されたものの一部を検鏡させていただいた。

試料の2~5gを200mlピーカーにとり、約15%の過酸化水素水を加えて加熱し、炭質物の酸化と漂白を行う。水を加えて懸濁させて1昼夜放置した後傾斜法で上澄を捨てる。これを5~7回繰り返しし可溶性塩類と粘土の微粒子を取り除いた後、一部を試験管にとり水を加えて適度に薄めてから、ストローを使って取りだし、カバーガラスに様に塗布して徐熱乾燥後プレオラックス(和光純薬製商品名「マイントメディア」を使用)で封入し永久プレパラートを作成する。各試料ごとに4~5枚のプレパラートを作成した。

検鏡は光学顕微鏡により600倍で行い、必要に応じて油浸により1500倍で検鏡と写真撮影を行った。

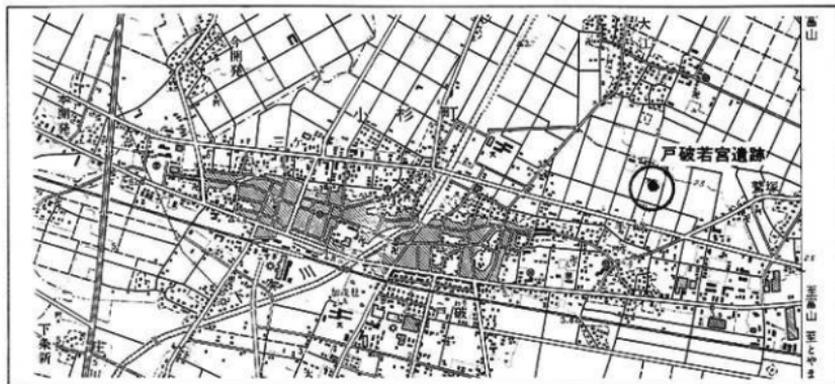


図1 戸破若宮遺跡の位置図(この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「高岡」を使用したものである)

3. 戸破岩宮遺跡の珪藻概観

ここでは、採集した試料のうち、20cmごとの11試料について予察した。

遺構面直下のHW-00, HW-20, HW-40, ではほとんど珪藻は検出されなかった。

HW-00では1枚のプレバートから珪藻殻1個程度の検出頻度で、これは試料1g当たり100個程度の含有量になる。検出した種は、*Nitzschia* sp., *Gomphonema* sp.である。

HW-20からは珪藻殻は検出されなかった。

HW-40からは*Neidium* sp., *Synedra* sp.の微小片のほか *Thalassionema nitzschioides*, *Coscinodiscus* sp.の破片も検出した。後二者は海水種であるが、これらは後背地の新第三紀層から由来し再堆積したものと考えられる。

井戸跡壁面から採集した試料HW02~HW16では、上部のHW-02から*Gomphonema* sp., *Cymbella* sp., *Eunotia* sp.を検出した。その含有量は1g当たり500~600個程度である。

HW02からの検出が一番多く、1枚のプレバートから破片も含めて42個を検出した。これは試料1g当たり2000個程度の含有量になる。検出されたおもな種は、*Cyclotella* sp., *Gomphonema* spp., *Synedra* sp., *Eunotia* spp., *Fragilaria* spp., *Coconeis* sp., *Stauroneis* sp.等である。

その他の層からはほとんど検出されなかった。これは著しく腐植物に富んだ堆積物であって、一般にこのような堆積物からは珪藻が検出されにくいことも知られている。

いずれにしても、戸破岩宮遺跡で採集した試料からは、海水の影響を示すような珪藻遺骸群集は検出されず、地下2m付近までの堆積物は淡水域で堆積したものであることが分かった。



図2 戸破岩宮遺跡の井戸跡



図3 井戸跡壁面での試料採取



図4 井戸跡壁面上部での試料採取

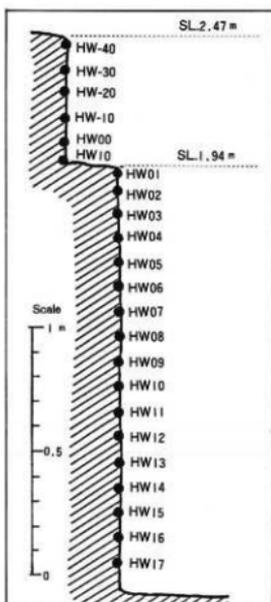


図5 井戸跡壁面試料採取位置

表1 小杉町民第2体育館 No.3 ボーリング試料一覧

試料番号	深 度	報告書の土質名	処理試料外観	備 考
3-01	1.15~ 1.45	砂	褐灰色 細~中粒砂	
3-02	2.15~ 2.45	有機質シルト	黒黒色腐植質粘土・黒色腐植土	淡水珪藻の破片多し
3-03	3.15~ 3.50	有機質シルト	黒黒色腐植土・黒黒色腐植質シルト	
3-04			[試料なし]	
3-05	5.15~ 5.45	砂	褐色 中~細粒砂(比較的均質)	
3-06	6.15~ 6.46	砂	褐灰色 細~中粒砂	
3-07	7.15~ 7.50	粘土質シルト	黒~灰色 粘土質シルト	Rhopalodia 1個検出
3-08	8.15~ 8.45	粘土質シルト	黒~灰色 粘土質シルト(貝殻片含む)	海水珪藻多量に含む
3-09	9.15~ 9.45	粘土質シルト	青灰色シルト(砂質)	
3-10	10.15~10.45	砂	黒~灰色 細粒砂	
3-11	11.15~11.45	粘土質シルト	暗灰色 粘土質シルト	淡水・汽水珪藻多い
3-12			[試料なし]	
3-13	13.15~13.45	砂	青灰色 細粒砂	
3-14	14.15~14.45	砂	青灰色 シルト質細粒砂(極細砂)	
3-15	15.15~15.46	砂質シルト	灰色 砂質粘土	
3-16	16.15~16.39	砂礫	灰色 砂礫	
3-17	17.15~17.29	砂礫	灰色 砂礫	
3-18	18.15~18.34	砂礫	灰色 砂礫	
3-19	19.15~19.30	砂礫	灰色 砂礫	

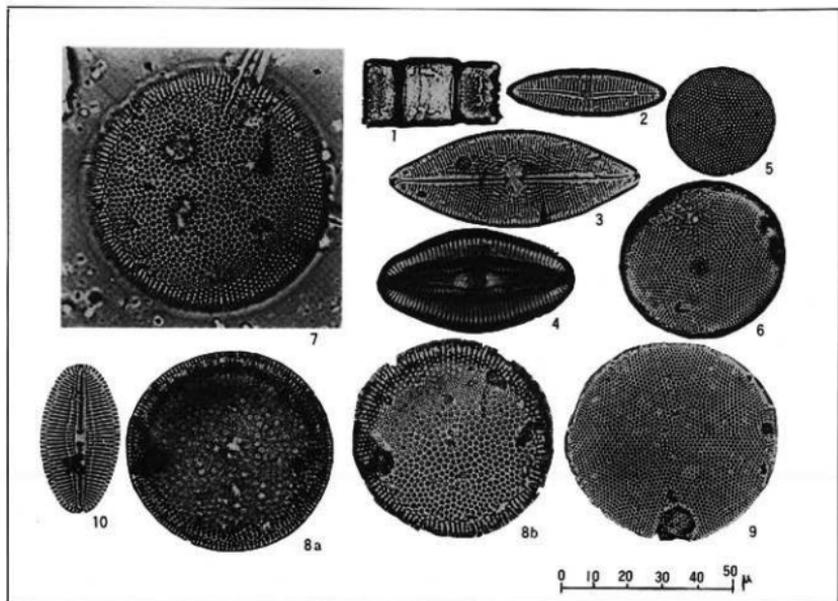


図6 小杉町民第2体育館地下の海水生・汽水生珪藻 1.*Biddulphia aurita* var. *obtusa* 2.*Achnanthes brevipes* var. *intermedia* 3.*Navicula punctata* 4.*Diploneis* sp. 5.*Thalassiosira excentrica* 6.*Coscinodiscus* sp. 7-8a,b. *Coscinodiscus curvatus* var. *minor* 9.*Coscinodiscus subtilis* 10.*Diploneis smithii*

4. 小杉町民第2体育館ボーリング試料の珪藻観察

珪藻分析に使用した試料は No 3 ボーリングの17試料 (3-01~3-19うち3-04・3-12は試料なし) である。堆積物の粒度から砂~砂礫からはほとんど検出されないのが普通である。珪藻化石の検出状況は表1のとおりである。

3-02からは *Eunotia*, *Cymbella*, *Gomphonema*, *Pinnularia*, *Synedra*, *Stauroneis*, *Eunotia* などの属が検出されたが破片が多くしかもいずれも淡水珪藻である。

3-08からは *Coscinodiscus curvatus*, *C. subtilis*, *Thalassiosira excentrica*, *Achnanthes brevipes* ver. *intermedia*, *Biddulphia aurita* var. *obtusa* などの海水生珪藻のほか *Coscinodiscus lacustris*, *Navicula punctata* などの汽水生珪藻も検出された。この試料には海産の貝殻片も含まれており、明らかに海の影響を受けていたものである。

3-11からは、淡水生珪藻の *Achnanthes*, *Cymbella*, *Cocconeis*, *Gomphonema*, *Navicula*, *Neidium*, *Nitzschia*, *Surirella*, *Tabellaria* 等の属に混じて *Navicula punctata*, *Diploneis* sp. などの汽水生珪藻が検出された。このことから、この層の堆積時には海水の影響がいくらかあって、汽水域ができていたことが分かった。

5. おわりに

戸破若宮遺跡付近の水環境の変遷について、化石珪藻をもとに考察したいと、含有珪藻の検鏡を進めてきた。しかしまだ十分に検鏡を終えることができなかったが、中間の報告としてここにとりまとめた。さらに検鏡を続け後日詳しく報告したい。

戸破若宮遺跡から得た試料については、一部定量的に珪藻殻の量を求めてみた。戸破若宮遺跡の井戸跡からの試料には海水の影響は認められなかった。

ボーリング試料では砂および砂礫からは珪藻は検出されなかった。検出できたのはシルト質に部分からである。

その結果、地下11.5m付近から汽水の影響が現れ8.5m付近に明らかに海水の影響をしめす層準のあることが分かった。この層準は射水平野で知られているおよそ7000年前(放射年代)の縄文海進期の堆積物の層準と一致する。

[文 献]

- CLEVE-EULER, A. (1951-1955) Die Diatomeen von Schweden und Finnland (Authorized Reprint 1986)
- HUSTEDT, F. (1927-1964) Die Kieselalgen Deutschlands, Oestrichs und der Schweiz. In L. Rabenhorst's "Kryptogamen-Flora"
- HUSTEDT, F. (1930) Bacillariophyta, Diatomeae. In A. Pascher's "Die Suesswasserflora Mitteleuropas"
- HUSTEDT, F. (1985) The Pennate Diatoms (a translation of HUSTEDT's "DIE KIESELALGEN, 2.TEIL")
- SARODE, P. T. and N. D. KAMAT (1984) Freshwater Diatoms of Maharashtra
- 邑本順亮 (1991) 布目沢北遺跡の珪藻化石について、大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(1), p.77-79
- 野尻湖珪藻グループ (1987) 第9次野尻湖発掘および第4回陸上発掘における野尻湖層の珪藻遺骸群集地層研専報 32号
- 高橋啓一・神谷英利・黒岩俊明・小林将喜・山岸勝治・磯田真義・中島啓治・田中宏之 (1981) 群馬県碓氷村産のゾウ化石、および産出地の地質について、群馬県歴史博物館紀要 第2号

図版第 1



1. 遠景
北から



2. 近景
北から



3. 近景
北東から

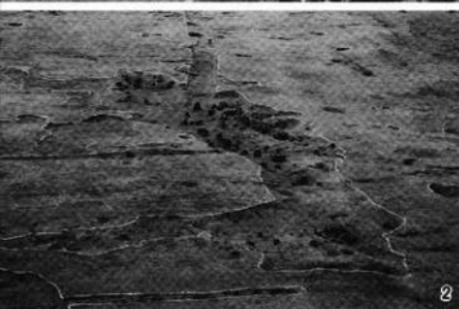


4. 西側調査区
南から

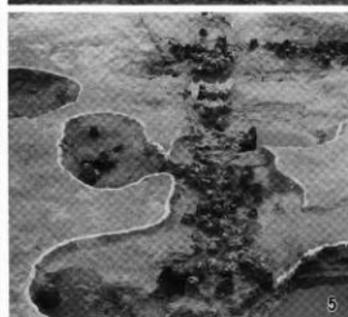
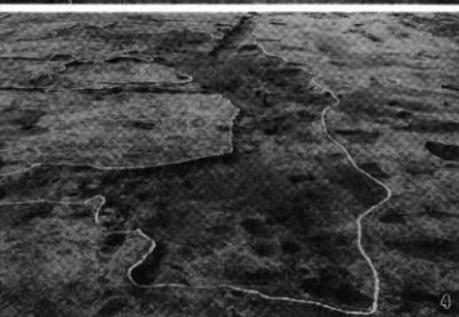
図版第 2



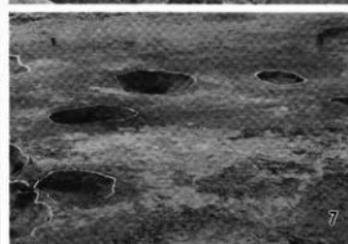
1. SD01
X38Y21付近
北から



2. SD03X28~X33
Y15付近
3. SD01
X53Y22付近



4. SD03
南から
5. SD01
X33~37Y20
付近



6. 手前SK11
7. 右からSK11・
12・16

図版第 3

1~4. SK40

1・2. 弥生土器の
出土状態

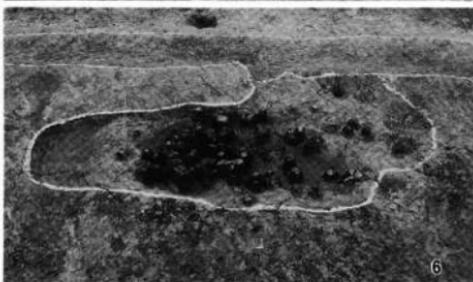
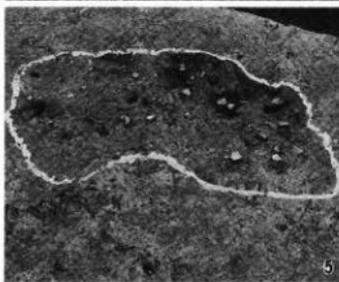
3. 東から

4. 北から



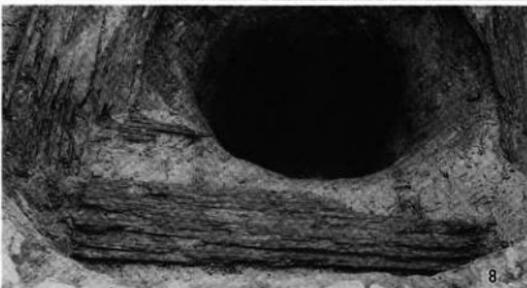
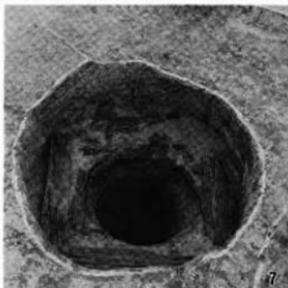
5. SK97

6. SK92



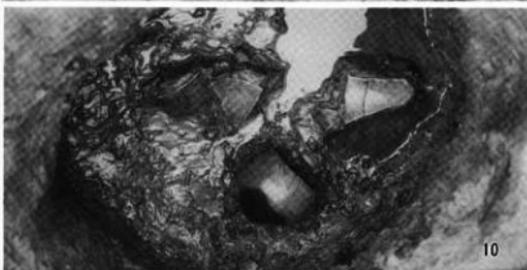
7・8. SE87

井戸(弥生)



9. SK65とSD55

10. SK41





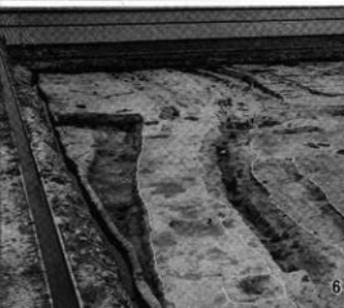
1~7. SD02
1. 遺物出土状態
東から



2・4. 遺物出土状態
3. 完掘の溝
Y21以西



5. 完掘の溝
Y27以西



6. L字状に曲がる溝 南から
7. 同上
東から

図版第 5

1. X46~55Y
10~40の遺構
東から



2. X46~53Y
29~40の遺構
南から



3. 東側調査区
南から



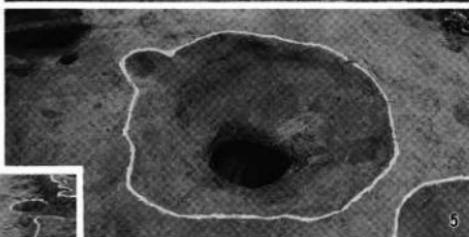
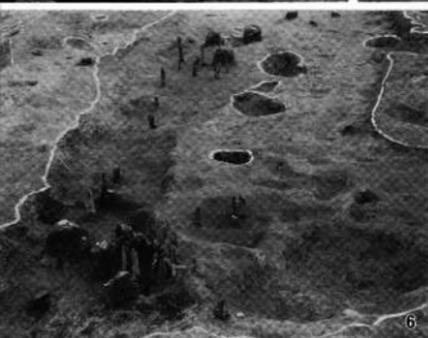
図版第 6



1. SD46(中央)
Y25以西
2. 左から SD
05・86・79



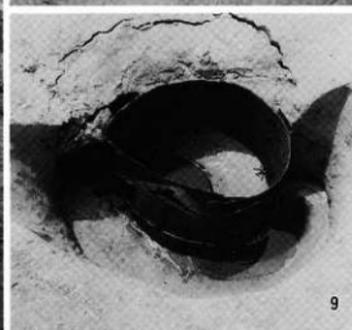
3. SD05 他
北から
4. SK53



- 5・8・9. SE38
曲物を用いた
井戸(中世)



6. SD05
杭列X46Y33
付近



7. 左側SD05
SK98など
南から
- 8・9. 入子状の曲
物の井戸

図版第7

1. X23Y24区の
板上からの椀・
刀子などの出
土



2~5. 用水路敷きの
調査
2. X10Y54列
以北



3. X58Y31~36
4. X58Y38~31
5. X3Y35~46

6~9. 発掘調査
の様子



図版第 8

出土遺物
(弥生土器)



1

1. 各遺構出土



2



3

2. SD01・10

3. SD01



4



6

4. SK40

5. SE87

6. SK41



5

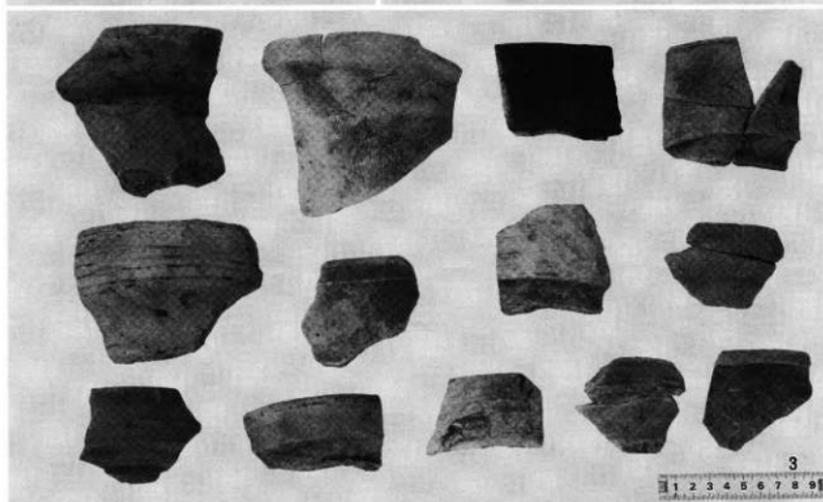
図版第 9

出土遺物
(弥生土器)

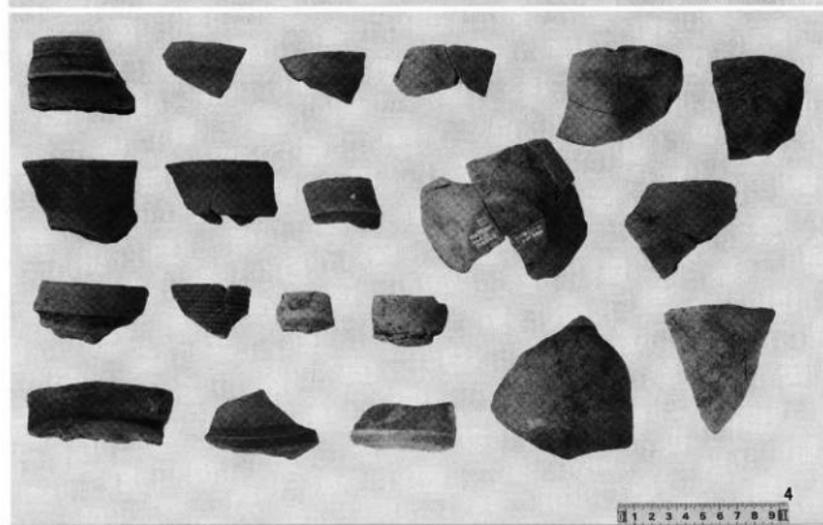
1・2. SE87



3. SD01

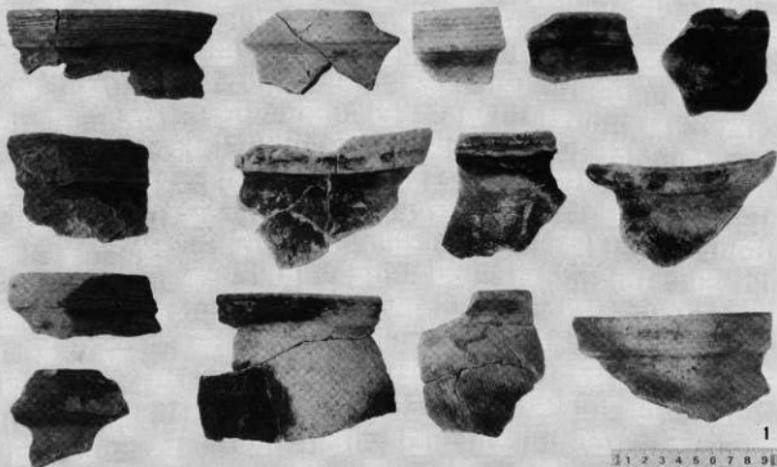


4. SD01

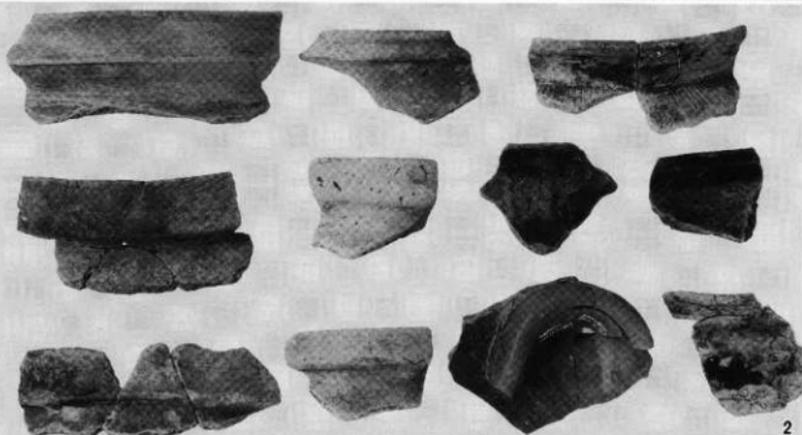


図版第10

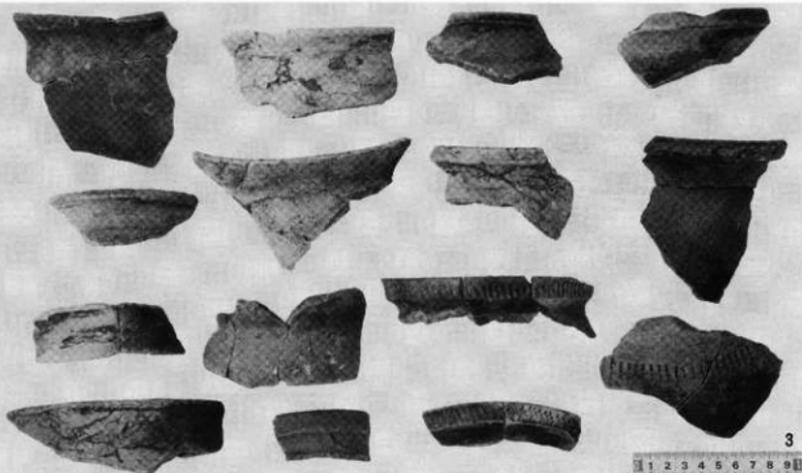
出土遺物
(弥生土器)



1. SD01



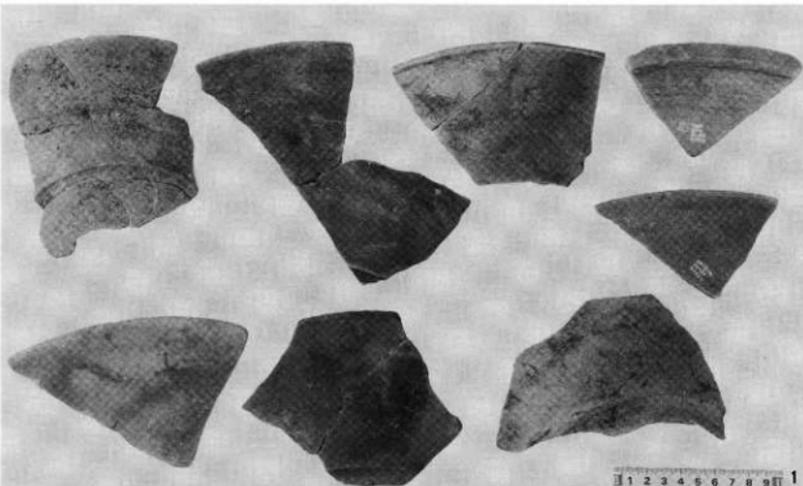
2. SD01



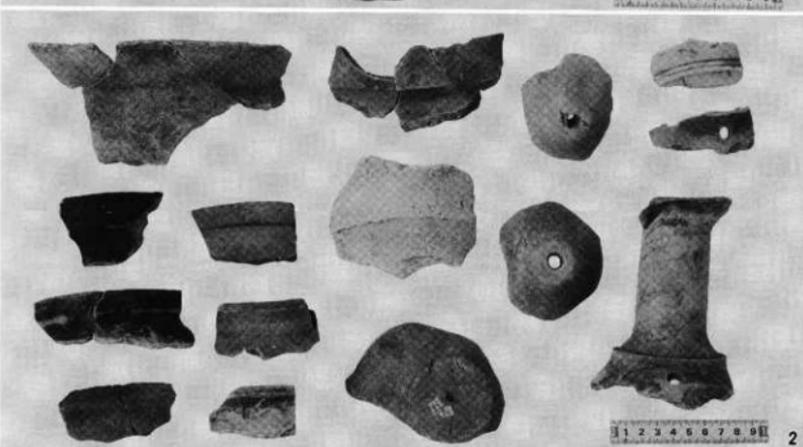
3. SD01
(約1:3)

図版第11

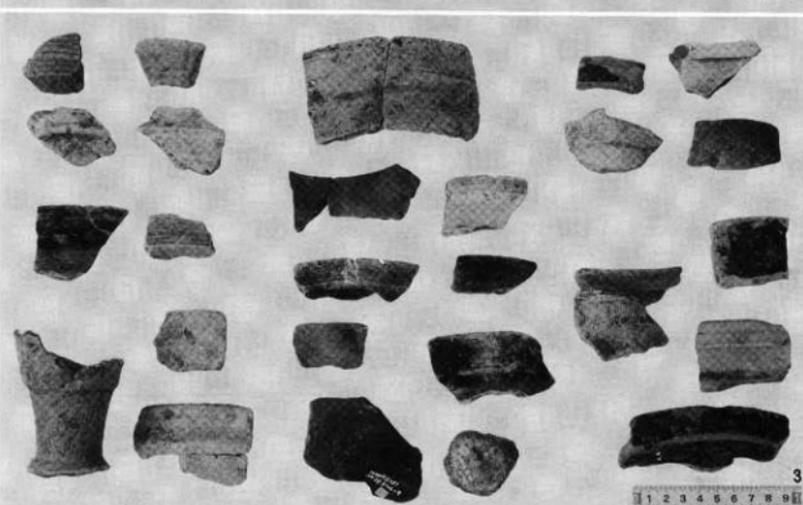
出土遺物
(弥生土器)



1. SD01



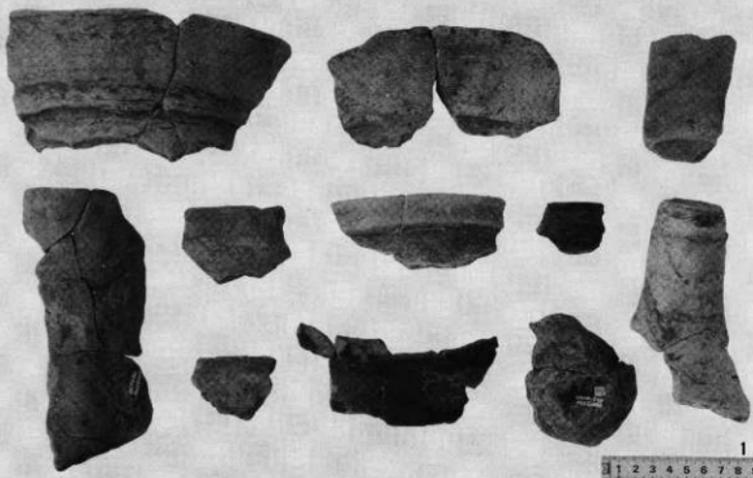
2. SD01・10



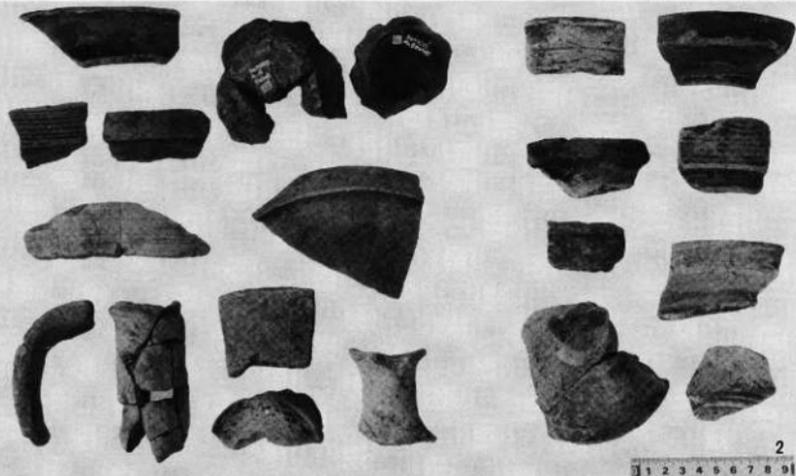
3. 左：SK80
中：SK92
右：SK97
(約1:3)

図版第12

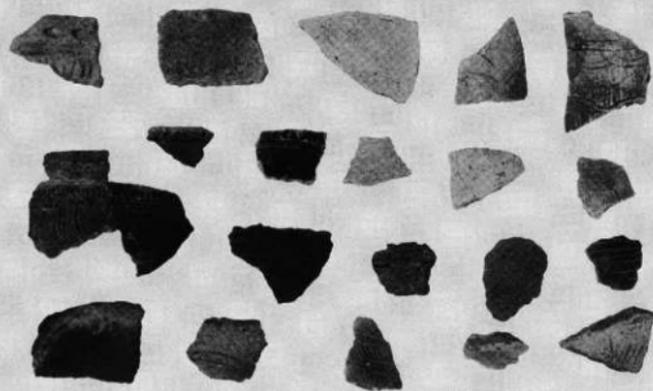
出土遺物
(弥生土器)



1. SK40



2. 左：SD02
右：SD03

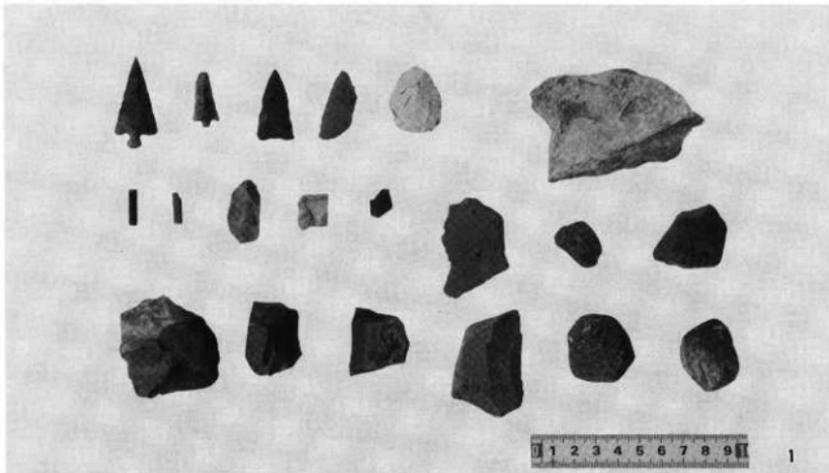


3. 左上：縄文土器、他は弥生土器
(約1:3)

3

図版第13

出土遺物



1. 弥生時代の石器



2. 砥石

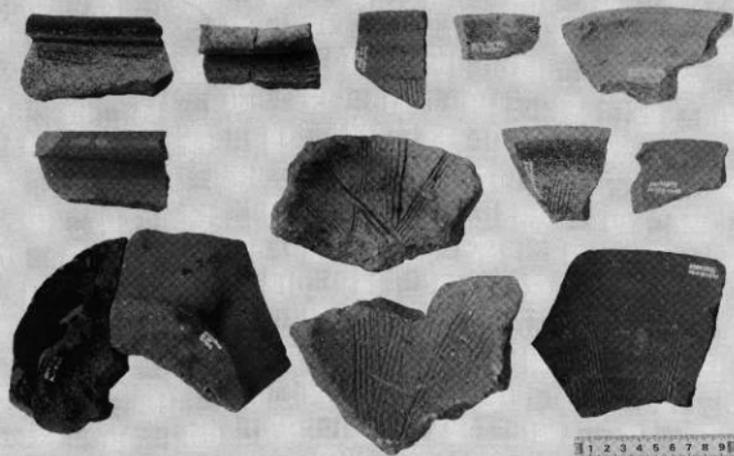


3. 左上：墨書土器、他は輸入陶磁器(青磁・白磁)

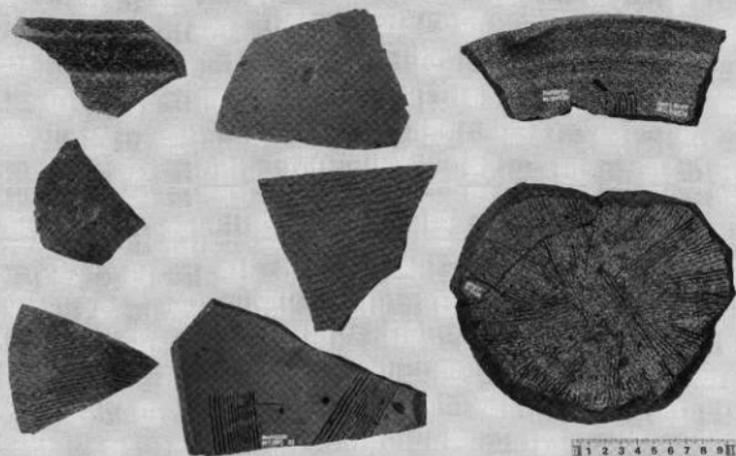


4. 青磁
5. 美濃瀬戸

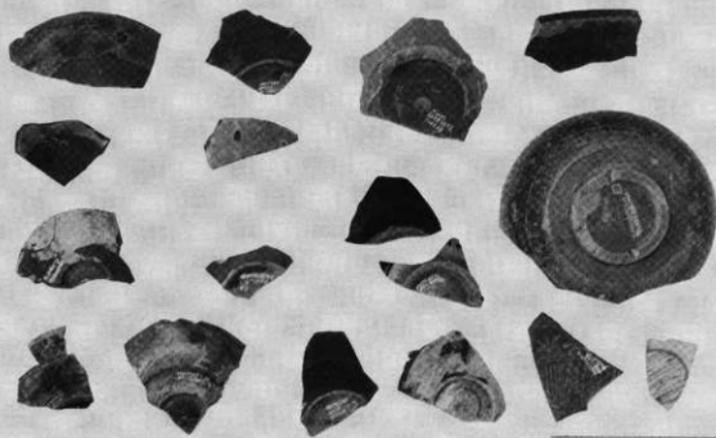




1. 珠洲



2. 珠洲



3. 近世陶磁器
(約1:3)

へわりわかみや
小杉町戸破若宮遺跡発掘調査概要

平成4年3月

編集 小杉町教育委員会
発行 富山県射水郡小杉町戸破1511
〒939-03 電話(0766)56-1511

印刷 日興印刷株式会社
